

THE DANCE AT DEATH

—— 踊子 ——

北村
想

登場人物

郵便局員（事件の第一発見者）

若い刑事

ベテランの刑事

大場虹子（三十八歳。ホテル『ゴールドラッシュ』のオーナー

大場春奈（二十七歳。虹子の妹、ダンサーのひとり）

豊川作造（五十歳。ホテル『ゴールドラッシュ』のマネージャー

子牛田建（こごた けん。四十五歳。盲目の振り付け師）

三谷真理菜（みつや まりな。十六歳。ホテルの客）

笹木あや（三十五歳。真理菜の付き人）

溝口万作（みぞぐち まんさく。四十三歳。ホテルの客、映画監督）

邑久手豆六（おくて とうろく。三十二歳。ホテルの客、男優）

西ユキ（二十六歳。ホテルの客、女優）

三崎小鈴（みさき こすず。二十八歳。ホテルの客）

伊達浩二（だて こうじ。三十五歳。ホテルの客）

小林リツ（二十才。ホテルの従業員）

ミッチー野村（ホテルのダンサー）

サリー杉山（〃）

土岩フーコ（〃）

浅田二郎（二十九歳。ホテルの客。新聞記者）

館純一（やかた じゅんいち。四十五歳。ホテルの客。ミステリ作家）

近藤啓介（三十五歳。ホテルの客。館担当の編集者）

踊子たち

プロローグ

某警察署の取り調べ室。

ベテランの刑事が、郵便局員を相手に聞きこんでいる。

刑事 「すまんね。何度も同じことをいわせるようで恐縮なんだが、こういうのは手順が面

倒でね。じゃあ、確認の意味も含めて、もう一度、あんたのみたことを話してもらおうが、

いいかね。

郵便局員 「ええ、いいですよ。何度いつても同じなんですから。

刑事 「あんたが、その、ホテル『ゴールドラッシュ』に郵便を配達にいったのは、その前の配達から五日ばかりたってからだったね。

郵便局員「ええ、そうです。

刑事「その理由は、えーと、あれだったね。

郵便局員「そこはですね、刑事さん、速達区域外なんです。

刑事「速達区域外ね。

郵便局員「つまり、日本の郵便事情は外国に比べますと、そりゃ、いいんです。早く、確

かに届くんです。しかし、いくらなんでも、ようするにひとの足ですからね、頼りになるのは。それで、地域によっては、速達区域外つてのがあって、そこは速達だろうが、普通郵便だろうが同じなんです。つまり、僻地への配達です。ただでさえ、そのホテルはそういう地域にあるんです。そこへきて、雪ですよ。たいへんな積雪で、これは雪上車じゃないと駄目なんです。それが、吹雪がつづいて、おまけに雪崩で途中の道まで塞がったものですから、けつきよく、前に配達をしてから、五日もかかったんです。

刑事「いつもそうなのかね。いや、いつもあんたが配達するのかね。

郵便局員「たいていはそうです。一日おきか二日おきに私がいきます。でも、ホテルにお

客があるときなんかは、出迎えの車両が下りてきますから、ホテルの従業員の方で、豊川作造さんというマネージャーがついでに取りに行くこともあるんです、局のほうまで。それが、どういわけか、五日たつても音沙汰がなかったんです。たいていそういう場合は先方から電話で問い合わせがあるんですが、それで、こつちから、電話もしてみたんですが、通じなくって。

刑事「で、えつちらおつちらと、あんたが出向いたんだね。

郵便局員「そうです。二時間かかりました。こつちも雪上車です。

刑事「いつも、それくらいかかるのかね。」

郵便局員「ええ、順調にいつても、それくらいはかかります。それで、車を降りて、玄

関まで行ったら、扉が開いてたんです。

刑事「中がみえたんだね。」

郵便局員「そうです。あそこのホテルは、扉を開けると、なんといいですか、そのう、西

部劇に出てくる酒場のような、ロビーだか、食堂だか、フロントだか、いろいろ兼用して
いるような広いフロアになってんです。

刑事「凶面でみたよ。二階が客室になってるんだね。」

郵便局員「ええ。私もくわしくは知りませんがね。」

刑事「そうしたら、あれかね。」

郵便局員「そうです、あれなんです。」

刑事「死体？」

郵便局員「ええ、死体です。それもひとつや二つじゃありません。」

刑事「確かかね。」

郵便局員「はい。もう、そりや、マグロみたいにこう、死体が・・・毛布がかけられてい

て、その、足首とか、額ですか、そういうのが分かるのもあるんです。それが、一列に並
べられてたんです。

刑事「二応、現場検証で、それは確かめられてるんだ。みんな炭になってたけどね。」

郵便局員「そうですか。そうですよね。燃えたんですから。」

刑事「で、あんた、そこで、女をみたんだね、・・・生きてる。」

郵便局員「そうです。女がこう、タンクを抱えて、ガソリンを、ええ、臭いがしましたか

らガソリンの。それを死体にかけて、そうなんですよ、刑事さん、私やそれで、そこに横たわっているのが死体だって分かったんです。だってただ寝てるだけなら、ガソリンなんてかけられて黙ってるわけないでしょ。

刑事「確かに、女だったんだね。

郵便局員「もちろんです。だって、こういったんですよ私に、女の声で。『近寄らないで

、入ってきちゃ駄目。ここには悪魔がいるのよ、死神がいるのよ』こうですよ。

刑事「悪魔に死神か。

郵便局員「それでも、私、躊躇して、グズグズしてたんです。そうしたら、拳銃ですよ。

ぶっ放しやがったんです、その女。私やもうびっくりして、逃げました。で、車のエンジンかけた時ですよ。また拳銃の音がして、次にガソリンがボウンと爆発する音がして、真っ黒な煙が吹き上がったんです。

若い刑事が入ってきた。

若い刑事「デカ長。

刑事「なんか、出たか？

若い刑事「ええ、鑑識の結果、この郵便局員の配達品の中から、コカインが1キロ。郵便小包の中にありました。

刑事「コカイン？

若い刑事「ええ。あんまり上質のものじゃないみたいですが、末端価格にすれば一千万くらいにはなるらしいです。

刑事「(郵便局員に) 心当たりはありますかね。

郵便局員「(大きく首をふる) じよつ、冗談じゃありません。そんなもの、私はただ、配達するのが仕事ですから。

刑事「宛名は？

若い刑事「伊達浩二です。

刑事「知ってるかね？

郵便局員「知りません。

若い刑事「ホテルの従業員じゃないようですね。

郵便局員「ええ、そういう名前の方はいなかったと思います。

若い刑事「じゃあ、宿泊客ですね。

刑事「だろうな。宿泊客の身元は割れてんのかね。

若い刑事「現在、分かっているのは、ここに。(と、メモをみせる) その○印がついてるの

が、従業員です。あとは、搜索届けも出てませんし、身元を確認できたのは、この三人くらいですね。

刑事「伊達浩二つてのは偽名だな、おそらく。

若い刑事「いったい、ホテルで何があったんでしょうか。

刑事「さあ、摩訶不思議な事件だな。

若い刑事「黒焦げの死体が18体。火事にしては、誰も屋外に逃げ出した様子もない。

刑事「だから、この郵便屋さんがいったら、みんな死体だったって。

若い刑事「じゃあ、最後まで生きてた、その、女は何なのでしょう？

刑事「殺人鬼かな？

若い刑事「その女はいま何処に？

刑事「さあてね、さっぱり分からんね。拳銃は出たのかね。

若い刑事「いいえ、まだ発見されてませんね。

郵便局員「ともかく、私はみたんですから、死体が並べられていて、女がガソリンをかけているところを。ほんとなんですよ。嘘じゃありません。

その毛布をかけられた死体。

に、ガソリンをかけていく、タンクを抱えた女。

女は、自らもガソリンを浴びると、拳銃を取り出して、引き金を引く。

ダーンという銃声。ガソリンに火がついて、燃え上がる死体。

死体が毛布を撥ね退けると、それぞれが踊子だ。

炎の中でダンスを踊り出す、踊子たち。

1

炎のダンスはつづく。

そこはホテル『ゴールドラッシュ』の一階のフロア。食堂とロビーとがあつて、中央に広

くとられたところはステージのようだ。

その炎のダンスをみるでなく、あたかも耳で彼女たちのステップを聞くようにして小首をかしげながら、白いステッキに身をあずけている男がいる。サングラスをかけているところから、眼が不自由なのだろう。

しかし、この男はダンスの振り付け師なのだ。このホテル『ゴールドラッシュ』に専属のダンスの振り付け師、子牛田建だ。

だから、この炎のダンスは、おそらく盲目の振り付け師である子牛田の脳裏にあるイメージであったのだろう。炎のダンスを踊っていた踊り手たちは三人を残して消え去っていく。残された三人は実在の踊り手たちだ。

ミッチー野村、サリー杉山、土岩フーコの三人は、かつて栄華を誇ったこのホテルにいまも残っている数少ない踊り手だ。

そのうち、土岩フーコが転んだ。

子牛田「誰だ、いま転んだのは。・・・土岩（つちいわ）だな。

土岩フーコ「すいません。

子牛田「土岩フーコとは、よくぞつけたな。芸名かそれは。

土岩フーコ「土岩は本名です。

子牛田「だろうな。ダンサーなら、誰もそんな無粋な芸名なんぞつけやせんからな。土岩

、ドガンだな。土管の土に岩石の岩、ドガンだ。きさまの倒れる時に聞こえる音だ。ドガン、ドガンッ。

土岩フーコ「失礼しちゃうわ。

子牛田「いいか、ドガン、よく聞くがいい。この世の中で転んではいけない仕事は三つある。

土岩フーコ「その一つはお相撲さんでしょ？」

子牛田「フィギア・スケーターと、ダンサーが残りの二つだ。ドガン、君は何だ？」

土岩フーコ「私、土岩です。ドガンじゃありません。

子牛田「君は何だ？」

土岩フーコ「ダンサーです。

子牛田「じゃあ、転ぶな。

土岩フーコ「バナナの皮が落ちてたのよ。

子牛田「そんな嘘が私に通じると思うのか。私の眼がみえないことをいいことに、ありもしないことをいうんじゃない。

土岩フーコ「ほんとうに落ちてたんじゃありません。私、ふと想像しちゃったんです。ここにバナナの皮が落ちてたら転ぶわねって。

子牛田「そういう余計な想像はしなくてよろしい。

土岩フーコ「そいで、私、それを避けようとして、そいで転んだんです。

子牛田「つまらん。君は踊りの才能もないが、ジョークの才能もないな。

土岩フーコ「だって、

子牛田「もういい。春奈さんはどうした。どうして稽古にこないんだ。

ミッチー「風邪ひいたとか、おっしゃってましたよ。

子牛田 「また、いつものサボタージュか。

サリー 「でも、ほんとにちよつと具合悪そうでした。

子牛田 「引っ張ってこい。風邪なんぞ、踊って一汗かけば治る。春奈さんを連れて来い。

いますぐ、ここにだ！

奥から春奈が現れる。

春奈 「怒鳴らなくつても、ここにいるわよ。ほんとにメクラなんだから。

子牛田 「これは、これは春奈さん、お早いですな。

春奈 「私、子牛田さんの皮肉を聞きに来たのでも、稽古に来たのでもないのよ、残念だけど。ねえ、豊川を知らない？

サリー 「マネージャーなら、出かけたんじゃないんですか。

春奈 「何処へ？

サリー 「町です。

春奈 「何をしに？

ミツチー 「お客さんがあるらしいですよ。お迎えにいつてらっしゃるんじゃないや。

春奈 「あら、めずらしい。ホテルにお客。こんな雪の日に。

子牛田 「そうです。お客があるんです。ですから、私どもはダンスの稽古をしているんです。伝わりませんでしたか。リツにいいつけておいたんですがね。

春奈 「いままで寝てたから、知らないわよ。

子牛田 「お昼寝ですか。

春奈 「風邪ひいたっていつてるでしょ。

子牛田 「豊川に何の用事なんです。

春奈 「あいつ、ネコイラズを台所にしかけたみたいなのよ。

子牛田 「それが何か？

春奈 「私のムーピーが、それを食べたらしいの。

子牛田 「ピー？何ですか、それは？

春奈 「ムーピーよ。子牛田さん、耳もお悪いようね。

子牛田 「ムーピー？・・・で、それがどうかしたんですか。

春奈 「私のムーピーがネコイラズを食べて死んじゃったのよ。

子牛田 「そも、ムーピーとは、何なのです。

春奈 「ロシア産のハムスターよ。

子牛田 「ロシア産のハムスター。ほほう、そんなものお飼いになってたんですか。

春奈 「柄にもなくっていいたいの？

子牛田 「いいえ、なかなかよろしい御趣味じゃありませんか。

春奈 「こないだ、港町のペットショップで買ったばかりなのに、作造のヤツったら、ネコ

イラズなんか、まくから。帰ってきたら、とちめてやるから、もう。

子牛田 「どうぞ、ご随意に。豊川作造くんなら、帰ってきましたよ。

春奈 「えっ、ほんと？

子牛田 「あいにく、私は耳がいいもんでね。あの音は雪上車のエンジンの音です。もうす

ぐ、あなた方の耳にも聞こえるでしょう。さあ、ダンサー諸君、解散だ。今夜は久し振りにお客を相手に、炎のダンスを披露しよう。

踊子たち、去る。

子牛田「春奈さん、よろしいですか、あなたにも踊っていただきますよ。(去る)

春奈「ちえっ、ドメクラ。あたしは風邪で具合が悪いのよ。おまけにムービーが。・・

雪上車の音が近づいてきて、止まる。

春奈「あつ、帰ってきたみたい。(ちよいと身を隠す)

豊川作造が客の荷物を持って現れる。

豊川作造「リツさん、リツさん。お客様の荷物をお願いします。

「はい」という返事がしたかと思うと、奥から、従業員の小林リツが出てくる。

リツ「お帰りなさいまし。

豊川作造「これ、荷物を半分お願いするよ。部屋割りは電話したとおりだから。

リツ「はい。・・・お客様は？」

豊川作造「まだ外にいらつしやる。この建物の外観がめずらしいらしくて、見学なさってる。・・・ああ、みえた。みなさん、こちらでございます。足下に御注意を。滑りますから。どうぞ、お寒いでしょうから、お早く中に。」

リツは、荷物を運んで去る。客たちがぞろぞろと入ってくる。

豊川作造「どうも、長旅お疲れさまでした。ここが、ホテル『ゴールドラッシュ』でございます。皆様方もうJRのポスターなどでご覧になった通りでございます。ここは、昔近所で砂金がとれまして、ちょうど、その頃に建ったホテルでございます。まるで西部劇に出てきそうな感じでございますよ。もう、当ホテルは、ウェスタン、カントリーでございます。都会の騒音はございません。ラジオもテレビもございません。あるのは、古き良き時代の音楽を奏でるホンキイトンクだけでございます。どうか、ごゆっくり、おくつろぎ下さいませ。」

客は総勢十人。その中の少女が、ステージらしいものに目にとめると、

少女「ねえ、運転手さん。」

豊川作造「豊川作造と申します。当ホテルのマネージャーでございます。あなたさまは、えーと、三谷真理菜さまでしたね。」

真理菜「へーえすごいな。ボクの名前、おぼえてるんだ。

豊川作造「マネージャーといえば、昔でいうところの番頭さんですからね。お客様の顔と

名前を記憶するのは、仕事でございます。

真理菜「ああ、そう。ふーん。

豊川作造「で、何か？

真理菜「踊子さんはいるんですよ。ほら、むかし、JRのポスターに出てた、あの。

豊川作造「ああ、はい、おりますよ。本日はアトラクションのショーもございます。

真理菜「うわっ、そりやスゴイ。やっぱり来て良かったね、笹木さん。

笹木「え、ええ。(豊川作造に)あの、お部屋のほうは大丈夫なんでしょうか。なにぶん

予約もとらずに参りましたので。

豊川作造「ええ、心配は御無用でございます。いやあ、お恥ずかしい話をして恐縮ですが

、当ホテルもバブルの時代は予約で満員だったんですが、昨今は、はい、お部屋はいつも

空けてお待ちできる体制でございます。はははは。・・・

真理菜「心配しないでよ笹木さん、パパには、後からボクがよろしくいっとくから。

笹木「ええ。・・・

男「おい、豊川さん。

豊川作造「はい、えー、伊達さまでしたね。何か？

伊達「ラジオもテレビもないというのはほんとかい。

豊川作造「ええ、ございませんが。

伊達「そうか。ふーん。

豊川作造「何か御都合でも。

伊達「いやいや、明日競馬のレース中継があるもんでね。

豊川作造「ああ、左様ですか。それなら、トランジスタ・ラジオがほんとは一台ございま

すので、御心配なく。天気予報なんぞはやはり、聞かねばなりませんので、はい。

伊達「そうか。そりゃ、そうだな。

豊川作造「では、みなさま、お二階の上がり口に部屋割りの表が張り出してございますの

で、荷物の大きなものは、私が運びますから、ここに置かれたまま、お二階のお部屋のほうへどうぞ。

客たち、各々動くが。

真理菜「ねえ、えっと、伊達さん。

伊達「えっ？何だい。

真理菜「あなた嘘つきですね。

伊達「何だって？

笹木「お嬢さま。

真理菜「ああ、ごめんごめん、気に障ったのならあやまるわよ。

伊達「俺の何処が嘘つきなんだ。

真理菜「競馬のレース中継だなんて。こんな冬の最中に、ラジオ中継するような競馬のレ

ースなんかあるわけないじゃない。

伊達「ほほう、あんた、刑事みたいなことをいうね。女のくせに。

真理菜「女のくせにはよけい。

伊達「……」。

笹木「すみません、おゆるし下さいませ。わがままなものですから。

真理菜「いっとくけど、ボク、宿帳の職業欄には探偵って書くつもり。

伊達「女のくせにがよけいなら、こう言い換えようか。こどもの、くせに。

真理菜「（笑う、嘲笑のような笑いだ）

笹木「お嬢さま！

真理菜「部屋へ行こうよ、笹木さん。なんかボク、わくわくしてきちゃった。のっけから

面白い展開なんだから。

客たちがいってしまい、豊川作造は、大きな荷物を幾つも抱えると、春奈が現れる。

春奈「作造！

豊川作造「あ、はい。あら、これは春奈さま。

春奈「このひとでなし！

豊川作造「ずいぶんな、いわれようですが、私、何かいたしましたか？

春奈「これ、何か分かる？（登山用のナイフを出す）

豊川作造「物騒なものをお持ちですな。

春奈「ムーピー殺しの罪で、お前を死刑にしてやる。

豊川作造 「いったい、なんのお話ですか。

春 奈 「死んじゃったのよ、私のハムスターが。お前のネコイラズのせいで。

豊川作造 「ムーピーというのは、ハムスターなんですか。

春 奈 「一昨日まで、私と姉さんが一緒に港町に遊びにいったの、知ってるだろ。

豊川作造 「ええ、虹子さまは何かお仕事だとか申されてましたが。

春 奈 「姉さんは、誰かと会ってみたいけど、私はお遊びしてたの。

豊川作造 「はい、それで、その、なんでしょう。

春 奈 「お土産に、ロシア産のハムスターで、ムーピーっていう高い買い物をしたの。

豊川作造 「左様ですか。

春 奈 「それが、お前のまき散らかしたネコイラズ食べて死んだのよ。どうしてくれるのよ。
。大事にしてたのに。

豊川作造 「しかし、あれは、厨房に仕掛けただけです。

春 奈 「ハムスターに、ここは居間で、ここは厨房でって判断できると思ってるの？

豊川作造 「しかし、冬場はネズミの餌も不足いたしますし、厨房あたりにネズミが出ない

たします。なにしろ、ヤツらは冬眠などいたしませんから。先達て保健所からのお達しが
ありましたので、それに、そんなに大事なものなら、カゴに入れるとか、

春 奈 「言い訳は無用。私はこれからムーピーのお墓を作ってやんなきゃならないの。

豊川作造 「はい、知らぬこととはいえ、どうも申し訳ございませんでした。

春 奈 「一匹一万円もしたのよ。ブラック・マーケットで買ったもんだから。

豊川作造 「じゃあ、密輸入の動物ですか？

春奈「そんなこと知るもんですか。ともかく、弁償してよね。」

豊川作造「いやあ、それは、私には。」

春奈「じゃあ、ムービーの後を追って、死んでよ。」

豊川作造「御冗談を。」

春奈「もう、気分、最悪。」

豊川作造「どうも、申し訳ありません。」

と、奥から春奈を呼ぶ声がする。

「春奈あ・・・」

姉の虹子が杖をついて出てくる。どうやら足が悪いらしい。

虹子「春奈、こんなところにいたのかい。」

春奈「そうよ、作造のヤツをとっちめてたのよ。」

虹子「（豊川作造をみて）豊川、もういいから、行って頂戴。今日はお客様が大勢だから

大変なんですよ。どうしたのかしらね、繁盛ね。」

豊川作造「そのようで、はい。では、失礼させていただきます。（去る）」

春奈「弁償だからね（と、豊川作造に）」

虹子「（ナイフをみて）その物騒なもの、しまつて頂戴。で、何を弁償させるって？」

春奈「あいつ、私のハムスター殺しちゃったのよ。」

虹子「ハムスターの一匹や二匹、なんだったの。」

春奈「ムーピーっていう特種なヤツなのよ。高かったんだから。

虹子「あのね、姉さん、お前にちよつと話があるんだよ。

春奈「話？後にしてよ。私、ムーピーのお墓をつくらなきゃいけないんだから。

虹子「そっちのほうこそ、後回しにおし。この話がまとまれば、ムーピーなんて、1ダースでも10ダースでも買えるんだよ。

春奈「あら、景気のいいこと。

虹子「春奈、真面目にお聞きよ。お前、映画女優になる気はないかい。

春奈「何よそれ、藪から棒に。

虹子「チャンスなんだよ、春奈。お前には姉さんが夢みて果たせなかったことを、やってもらいたいんだよ。

春奈「なくんか、話がよくみえない。

虹子「姉さん、足がこんなふうにならなければ、今頃は銀幕のスターだったんだよ。日本のミュージカル映画界をしょって立つ、女優だったんだからね。

春奈「その話はもう耳にタコができてるわよ。

虹子「春奈、だから、あんたが、姉さんの代わりにスターになるのよ。

春奈「おツムの具合でも悪いんじゃない？

虹子「正気だよ。いいかい、春奈、今日のお客の中に映画監督がいるんだよ。姉さん、知り合いに御招待するように頼んでおいたのよ。たぶん、今日お見えになつてはるはずだよ。それが、無類の女好きでねえ。

春奈「ちよつとお、その監督とイイ仲になれつての？

虹子「それだけじゃ、ないんだ。姉さんはお金持ちになっただよ。ね、あなたの身体と映

画監督と、姉さんのお金。これだけ揃えば、映画女優も夢じゃないだろ。

春奈「お金って、なにさ。ホテルは赤字つづきなんですよ。

虹子「売れたんだよ、このホテル。

春奈「ええっ！ここ、売っちゃったの？

虹子「そう、べらぼうな値段をふっかけたら、その値段で、ある財閥が買ってくれたんだよ。このあいだ、港町にいったのは、残りの手続きと、お礼の挨拶よ。

春奈「それって、リツさんや、作造は知ってるの？

虹子「いいんだよ、私たちはこのままホテルの営業を続ければ。半月前から権利が移っただけなんだから。豊川もリツさんも失業するわけじゃないんだから。

春奈「よく売れたわねえ、こんなホテル。

虹子「世の中というのは、酔狂と物好きでいっぱいなのさ。

春奈「で、あとは、私とその映画監督と仲良くなればいいってことなの？

虹子「お膳だては姉さんがしておくから、お前、今日は部屋の鍵を開けたままにしておく

んだよ。化粧をしてベッドにお入り。（こみあげる笑い）クククク、アハハハッ。春奈！半年もすれば、お前はスクリーンにデビューだよ。

春奈「今時、映画よりテレビのほうがよかない？

虹子「お黙り！まず、映画。なんといつても、女優は映画だよ。

春奈「分かったわ。女優ね。悪くはないわね。

虹子「そう。これで、姉さんの夢も現実になるのよ。クククク、ハハハハッ・あつそう

だ。お前、また私の口紅（ルーージュ）持ち出して、使っただろ。

春奈「あら、ごめんなさいまし。

虹子「あれ、高いんだからね。

春奈「ごめんなさいまし、返すわよ。

虹子「いいわ、貸してあげるわ、今夜はね、特別よ。ふふふ、ははは。（高笑いしつつ、

歌など口ずさんで去る）

春奈「正気かしら。

残りの荷物を取りに、リツがやって来る。

春奈「ねえ、リツさん。

リツ「はい？

春奈「最近、姉さんのようす、変だと思わない？

リツ「え？

春奈「おツムの具合よ。

リツ「さあ、そういうことは。

春奈「ねえ、今日の客の中に映画監督がいるってほんと？

リツ「ああ、なんか、そういう方、宿帳に。

春奈「へーえ、ほんとにいるのか。

リツ「何か？

春奈 「あのさ、このハムスター、埋めてきてくれない。適当に。

リツ 「ええ？でも、私、用事がいっぱい。

春奈 「あ、そう。じゃあ、いいわ。ゴミ箱にでも捨てよつと。ああ、それから暖房ゆるく

ない。私、風邪ひいたらしくって、寒くって。

リツ 「分かりました。

春奈 「あら、また雪が降り出した。これじゃあ、雪に閉じ込められてしまうわね。

2

春奈もリツも去って、真理菜が笹木と登場。

真理菜 「ねえ、みてた笹木さん。

笹木 「何をですか？

真理菜 「あのマネージャーと、春奈とかいう女よ。

笹木 「あの方たちが、どうかしまして？

真理菜 「ボクの勘じゃあ、きつと最初の犠牲者は、あの春奈よ。

笹木 「犠牲者って？

真理菜 「あの女もいつてたでしよ、ここが雪に閉じ込められてしまうって。つまりね、こ

こは閉ざされた山荘になるのよ。外部との連絡を遮断されて孤立するの。そうすると、次は連続殺人よね。これって、ありふれてるけど、一番面白いシチュエーションよ。

笹木「連続殺人だなんて、そんな怖いこと。

真理菜「だって、そうなんなきゃ、ボクは何のためにここに来たのか。・・・

笹木「あの、荷物の整頓がしたいので、部屋にもどってよろしいでしょうか。

真理菜「いいわよ。あのね笹木さん、金魚のフンみたいに、いつもボクについて歩かなく

つてもいいのよ。せつかくこんなところへ来たんだから、笹木さんも羽根を伸ばしなさい

よ。・・・ね。

笹木「はい。じゃあ。(去る)

真理菜は、奥の適当な椅子に座ると、ポケットから文庫本を出して読み始める。

と、小さな悲鳴が聞こえて、女がひとり、走って出てくると、中央で転んだ。

ハンドバッグの中身が散乱する。

その後を、中年の男が追って出てくる。さらに、若い男と若い女。

転んだのは、三崎小鈴、追ってきたのは溝口万作だ。

溝口「おいおい、何もとって食おうといってるんじゃないんだ。

三崎「やめて下さい。

若い男「監督、いけませんよ。

若い女「そうよ、監督、犯罪よ。

溝口「邑久手、ユキ、いつからお前ら俺にそんな偉そうな口、叩けるようになった。えら

い出世だな。

邑久手 「偉そうもなにも、駄目ですよ。

ユキ 「だから、飲まないでっていったのに。

溝口 「馬鹿野郎、俺はこの方をだな、女優にしてあげようとだな。

ユキ 「(三崎に) どうもスイマセンでした。飲むと見境ないんです。

邑久手 「(バッグから散乱したものを拾いながら) スイマセン。

三崎 「二度とごめんですよ、こんな狼藉は。

溝口 「おいおい、姉ちゃん、わしが誰だか知ってんのか。

三崎 「知りません。

溝口 「わしはな、映画監督の溝口万作だぞ。

三崎 「(バッグの中身を受け取ると) 失礼。(行ってしまった)

溝口 「ちえーっ・・・馬鹿だなあの女。

ユキ 「バカは、監督のほうよ。

溝口 「何いってんやんだ。俺はな、お前らに暴行シーンの演技指導をしてみせたんだ。

ユキ 「そんなの、指導されたくもないわよ。

溝口 「まあ、聞け。おい、お前ら、あの女の職業が何か分かるか。

ユキ 「分かるわけじゃないじゃない。今日初めて会ったんだもん。

溝口 「邑久手はどうだ。

邑久手 「分かりません。

溝口 「だから、お前らは駄目なんだ。俳優失格。

ユキ 「監督は分かるんですか？

溝 口「あたりまえだの、クラッカーさ。

邑久手「何です、あのひとの職業。

溝 口「ダンサーだ。

邑久手・ユキ「ダンサー？

溝 口「そう。ダンサー、踊子だ。

邑久手「何で分かるんです。まるで、シャーロック・ホームズですね。

溝 口「けっ、映画監督二十五年の溝口万作をナメちゃあいけねえつての。いいか、人間の

職業なんざ、その肉体を観察すれば、分かるんだよ。そうそう、邑久手、お前のいう通り

だ。まあ、俺はシャーロック・ホームズのようなもんだな。

邑久手「あのひと、そういう肉体をしましたか。

溝 口「してたね。歩き方を観れば、一目瞭然、俺は麓の町で会ったときに見抜いてたよ。

立方と歩き方でいっぱつだ。まあ、転び方はマズイがな。へへへ。仕方なからう、ダンサ

ーってのは、転んじやいけない仕事だからな。だから、俺は、次の映画にあいつを使って

やろうかと、そういう心でもってだな、

ユキ「抱きついて、追っかけたとでもいうの。

溝 口「そうさ。

邑久手「次の映画って何です。『シャル・ウィ・ダンス』のパロディかなんかですか。

溝 口「バカ。今度は本編だよ。

ユキ「え？監督、今度、本編撮るんですか？

溝 口「そうさ。

邑久手 「いやあ、初めてお聞きしました。そうだったんですか。おめでとうございます。

溝 口 「まあまあ。そのためにこんな辺鄙なところに来たってわけさ。

邑久手 「ここ、何か、関係あるんですか。

溝 口 「ロケ・ハンだよ。鈍いなお前。

邑久手 「ああ、そうだったんですか。

溝 口 「タイトルだって決めてある。『雪に血は踊る』だ。どうだ、ミステリーだぞ。

邑久手 「ミステリーですか。

溝 口 「しかも、ミュージカルだ。探偵は歌って踊って謎を解く。これ、キャッチ・コピーだ。なかなかいい惹句だろ。

邑久手 「ええ、いいですね。それで、あの僕たちも。

溝 口 「出演交渉かよ、さっそく。

邑久手 「はい。

溝 口 「心配すんな、苦労を分かちあった戦友だからな。出してやるとも。

ユキ 「あ、あの、私も？

溝 口 「てめえは俺にタテツクことが多いからなあ。・・・

ユキ 「だってそれは、

溝 口 「冗談だよ。出してあげますよ、西ユキさん。よっ、大女優。

邑久手・ユキ 「ありがとうございます。

溝 口 「ちえっ、これだ。すぐに掌を返しやがる。まったく役者ってヤツは乞食だな。

邑久手 「何といわれようと、僕は監督の映画に出られれば光栄です。

溝 口「ふん、ほんとかよ。ただの、ピンク映画の監督だぜ、俺は。」

邑久手「いえ、監督は、ピンク映画界の溝口ケンジです。」

溝 口「まあ、そういわれもしてるようだな。名前も同じ溝口だしな。(ポケットからウイ

スキーを出して、飲む)

ユキ「監督、駄目ですよ。」

溝 口「楯突くんじゃ、ねえつての。まあ、いいじゃないか。めでたいんだから。(若干、

しみじみと) そうだよなあ。よくもまあ、生きながらえてきたよなあ。昔は、学生の連中

やサラリーマンもこぞつて、俺の映画観たもんだ。ピンク映画の芸術派なんていわれてよ

、あの大島渚と対談したことだつてあるんだからな。それが、どうだ、ええ、邑久手、最

近はどうだ、演技も脚本もいらねえ。モザイクひとつあればいいつてな。なんだい、あれ

は。人間てのは獣じゃないんだ。何がアダルト・ビデオだ。馬鹿じゃねえか。やりやいい

つてもんじゃないだよ、からみつてのは。」

邑久手「ええ、おっしゃる通りです。」

溝 口「おっしゃる通りの、お前のアパートに何でアダルト・ビデオがこつそり並んでるの

。このスケベ野郎のマスクキ小僧。」

邑久手「いえ、あのですね、アダルト・ビデオの中にも、けっこういい作品が、

溝 口「うるさいよ。掃き溜めの鶴なんざ、何処にだつてあるさ。ああ、嘆かわしい。こつ

ちは今じゃ年寄り相手の産業に落ちてしまった。家でアダルト観られない御老人が、こつ

そり映画館で観るのが、俺たちのポルノ映画つてわけだからな。ポルノ映画館に行つてみ

ろ。まるで敬老老人ホームじゃねえか。しかし、しかしなあ邑久手よ。」

邑久手 「はい。」

溝 口 「人間というのは、幾つになってもエッチでスケベで好きなんだよ。」

邑久手 「はい、そう思います。」

溝 口 「たとえ老人の慰みものになろうとも、だ。俺はピンク映画の王道を生きてきたぞ。」

邑久手 「その通りですよ、監督。」

溝 口 「今度の本編にも、たっぷりエロをきかせてやる。ミュージカル、ミステリー、そう

してエロチシズムだ。『雪に血は踊る』だ。運命の下に、あたかも踊らされる踊子のごとく、ひとびとは翻弄されながら、死へと導かれていく。ここ下りたら、さっそく撮影台本の準備にかかるからな。

邑久手 「はい、期待してます。」

溝 口 「さてと、散歩がてら、ちよいと外のロケ・ハンでもするか。」

ユキ 「でも、雪降ってますよ。」

溝 口 「酔いもさめるし、好都合だ。ついて来い。」

邑久手 「あ、はい。」

ユキ 「やだあ、風邪ひいちゃう。」

溝 口 「楯突くんじゃねえっての。」

三人、出て行った。

真理菜が、彼らのいた場所まで歩いてくる。かがみこんで、何やら拾う。と、すこぶる幸せそうな表情になって、それをポケットに仕舞い込み、笑って奥に去った。

虹子が来た。

虹子「作造、作造、いないの？」

豊川作造、出てきて。

豊川作造「はい、何か御用でしょうか。」

虹子「いまここで映画監督の溝口万作さまのお名前が聞こえたんだけど。」

豊川作造「映画監督、ああ、あの溝口さまというのは、映画監督様でしたか。」

虹子「そうよ。私が頼んで招待したんだから。で、何処へいかれたの？」

豊川作造「いやあ、私は存じませんで。」

虹子「そう、仕方無いわね。」

豊川作造「お捜しいたしましょうか。」

虹子「いいわ、私が捜すから、あなたは春奈を呼んできてちょうだいな。」

豊川作造「春奈さまですか。」

虹子「そう。あら、外に声がする。きっと、外ね。いいから作造、お前は春奈を。」

豊川作造「はい、かしこまりました。(去る)」

溝口たちもどつてくる。

溝 口「ひえーっ、さぶろう。

ユキ「風邪ひいちゃうよう。

邑久手「こりや、撮影のときもたいへんですね。

溝 口「(ポケット壘が空になったので) おい、ユキ、ウイスキー持ってこい。

ユキ「そんなもの何処にあるのよ。

溝 口「お前、みえないのか、そこんところ、バーのカウンターだろ。あの棚にいくらでもあるじゃないか。

ユキ「だって、そんなことしたら、泥棒よ。

溝 口「かまうもんか。

ユキ「でも。

虹 子「いいえ、かまいませんわ。好きなだけどうぞ。

ユキ「あら・・・

溝 口「これは、気がつきませんでした、・・・どなたで?

虹 子「当ホテルのオーナーで大場虹子と申します。

溝 口「ということは、私を招待してくださいっすか?

虹 子「はい、私です。

溝 口「これは、どうも、こんなところで。おい、挨拶しろ。

邑久手「どうも、僕は俳優の邑久手豆六です。

ユキ「女優の西ユキです。

虹 子「私、大場虹子でございます。

溝 口「この度は、御好意にあまえまして、こんなまで、一緒に連れて来てしまいました

。御迷惑ですが、御勘弁を。

虹 子「いいえ、何人でも、よろしゅうございますわ。

溝 口「なかなか結構なホテルですな。いやあ、面白いロケーションです。

虹 子「お褒めにあずかって、光栄ですわ。このような寂れたホテルにお泊まりいただいて、こちらこそ恐縮しておりますのよ。

溝 口「とんでもない。なっ。

邑久手「はい、いいところですよ。

虹 子「すぐに分かりましたわ、皆様方が映画の方だって。私、勘がいいんです。それにこれでも、昔は銀幕に出たこともあるんです。

溝 口「へえ、そうですね。

虹 子「端役の踊子でしたから、きっと御存知ないと思いますけれど。（ステッキを放して）私も昔は踊ってましたの。（少し踊ってみる）

溝 口「ははあ、なるほど。

虹 子「（転ぶ）ああっ。

溝 口「大丈夫ですか。（抱き起こす）

虹 子「待っておりました。その優しき。ワザと転んだのよ。

溝 口「えっ。

虹 子「いいわ、出てあげる。あなたの映画に。

溝 口「私の映画にですか。

虹子「そうよ。

溝口「しかし、私の映画は、普通じゃないんですが。

虹子「ひひひ、私だって普通じゃないもの。

溝口「いや、かといって異常でもないんです。

虹子「主役じゃなきや駄目よ。

溝口「困ったなこりや。

虹子「芸術のためなら、裸にもなるわ。

溝口「ですから、私どもの映画は芸術のためでなくとも、裸になるんです。

虹子「昔は、このホテルもそりやあ、繁盛して、踊り子も大勢おりましたの。バブルが弾け

てこんなふうになってしまいましたけど。私は、もっと大きな劇場で踊ってたんですよ。
。足さえ、足さえこんなふうにならなければ。ああ、おお、ああっ。・・・

溝口「お察しいたします。

虹子「ステッキを。

ユキ「(ステッキを渡してやる)

虹子「あとで、お部屋のほうに伺ってよろしいかしら。

溝口「ええ、もうそりや、かまいませんが。

虹子「大切なお話があるんですの。おほほほほ。

溝口「そうですか。じゃあ、我々は失礼しようか。

虹子「では、後で。

監督たち三人、奥に去る。

虹子は『オーバー・ザ・レインボー』など口づさんで、またちよつと踊ってみる。

豊川作造が伊達とともに来る。

豊川作造「虹子さま。

虹子「遅いじゃないか、春奈はどうしたの。

豊川作造「それが、お部屋に参りまして、豊川作造ですと申し上げてノックをしたところ

、中からガチャリと鍵をおかけになりました。いやどうも、ムーピーとやらのもので、私
ずいぶんと嫌われてしまったようでして。

虹子「鍵を……。あらそう。まあいいわ。私が行ってみるわ。この方は？

豊川作造「はい、伊達さまは、ラジオがご所望なのですが。

虹子「お前のところに一台あったんじゃないの。

豊川作造「ええ、それが見当たらないんです。

虹子「そう、変ね。あつ、分かったわ。春奈よきつと。私いつてくるから。（去る）

豊川作造「お願いいたします。

伊達「他にはラジオはないのかい。

豊川作造「はい、あれ、一台きりで。変だな、机の上にあったんですがねえ。

伊達「このバーの酒は飲んでもいいのかい。

豊川作造「はい、御自由にどうぞ。

伊達「じゃあ、いっぱいやらしてもらおうか。

豊川作造 「それでは、私はこれで。

豊川作造去ると、小林リツが入れ代わりに出てくる。

伊達 「メイドさん、そろそろ飯かい。

リツ 「(テーブルを整えながら) はい、小一時間で夕食でございます。

伊達 「電話したいんだが。

リツ 「はい、こちらでございます。

二人去ると、しばらくして虹子もどってくる。

虹子 「リツさん、リツさん、少し冷えるわよ。ヒーターを強くしておいて頂戴。

リツ、もどってくる。

リツ 「はい、何か。

虹子 「少し寒いわ。

リツ 「はい。(去ろうとする)

虹子 「ちよつと待って。

リツ 「はい？

虹子「春奈だけど、御機嫌ナナメで返事ひとつしやしないの。ドアに鍵をかけたまま、私

が呼んでも開けてくれやしないのよ。夕食の支度ができたら、呼んできて頂戴ね。

リツ「はい、かしこまりました。

虹子「外は雪かい？

リツ「ええ、少し吹雪いているようです。

虹子「暖房を強くね。

リツ「はい。(去る)

入れ代わりに三崎が来る。虹子、顔があつて、会釈するが、

虹子「(小さな悲鳴のような) ひっ！

三崎「えっ？

虹子「いえ、失礼しました。あとう、お客さまは？

三崎「三崎です。

虹子「ミサキさまですか。

三崎「はい。三崎小鈴ですが。

虹子「・・・どうも、失礼いたしました。

三崎「あの、私に何か？

虹子「いいえ、なんでもございませんわ。

三崎「(首をかしげる)

虹子「(目を伏せる)

三崎「(話題を変えるつもりで) この雪じゃ、散歩は無理ね。

虹子「もうすぐ御食事でございますから。(そそくさと去る)

三崎「(床をサーチするようにみている)

伊達、もどってきて、

伊達「お嬢さん、何か捜しものかい？

三崎「(その声に振り向く)

3

ステージに見立てられたところでは、踊り子たちのダンスのショー。

食事もあらかた終わったらしいひととき、客たちは食後のコーヒーなど飲みながら、それを退屈そうに観ている。

溝口「何だか貧乏くさいショーだな。おい、ユキ、お前代わりにストリップでもやってこ

いよ。

ユキ「誰が、そんなサービスするもんですか。

溝口「ちえつ、場末の小屋で裸踊りしてたお前をひろってやったのは俺だぞ。

やがて、ダンスはすんだ。

客は談笑を始める。

真理菜 「ここで殺人事件でもおこると面白いんだけどなあ。

笹木 「お嬢さま。

館 「いやいや、たしかにそれは一興ですな。

真理菜 「でしょ。

館 「シチュエーションとしては申し分ありませんね。

真理菜 「叔父さんは？

近藤 「この方は作家の館純一先生です。

真理菜 「ええっ、館純一ってあの、ミステリ作家の。

近藤 「私は担当の編集者しております、小学研究社の近藤というものです。

真理菜 「わあ、そりゃ、すごい。

館 「いやいや、お嬢さん、私を御存知なんですね。

真理菜 「ええ、幾つか著作を拝読しましたから。えーと、『集合論殺人事件』『走者は撃

たれる』『デザートは君と』『ヘッポコ探偵・日暮』『キについての事件』『ヌラリヒョ
ンはなぜ殺される』『犯人はドイツ人』、ねっ。

館 「ほほう、作家冥利につきますね。

真理菜 「ここには、お仕事なんですか？

館 「そうそう。いわゆる缶詰というヤツですね。

浅田 「こんな辺鄙なところでお仕事ですか。ああ、私は、新聞記者をしております、浅田二郎ってものです。

近藤 「館先生はいつもそうなんです。かつて江戸川乱歩先生が土蔵の中で、蠟燭一本で執筆されたように、こういった雰囲気のところ、本をお書きになるんです。

館 「街のホテルじゃけつきよく、気が散りますからね。

真理菜 「館先生、どうですか、ここなら、どんな殺人が起きるんでしょう。

館 「さあね。まだインスパイアされるものはありません。しかし、ここは現在のところ、閉ざされた山荘という状況ですからね。

真理菜 「そうなんですよ。まさにそうなのよね。クリステイの『ねずみとり』や『そして誰もいなくなった』と同じでしょ。

館 「そういうことですね。

浅田 「広い意味でいえば、ミステリーというやつは、たいていがそれですね。何しろ警察の無能つてのが条件のひとつですからね。『グリーン家』も『Yの悲劇』も。

真理菜 「つまり、それはこういうことなの？ミステリーというのは小説自体が閉ざされた山荘と同じだってことよね。犯人は登場人物の中に必ずいるんだもんね。

邑久手 「登場人物以外に犯人がいると面白いですね。

館 「（軽くいなすように笑うと）そりゃあ、君、フェアじゃないな。

真理菜 「人間が犯人じゃないってのなら、ありますよね。

館 「ポーの『モルグ街』ですね。

真理菜 「ドイルの『まだらの紐』も。

館 「お嬢さんは、ずいぶんとミステリ愛好家のようですね。

真理菜 「ボクは探偵ですよ。

館 「おや、これは参ったな。

真理菜 「明智小五郎、金田一耕助、巨勢博士（こせはかせ）、神津（かみづ）恭介、鬼貫

（おにつら）警部、朝霧一平、ハイカラ右京、仁木雄太郎、中村雅楽、陶展文、砂絵のセ

ンセー、十津川警部、赤かぶ検事、ミス、キャサリン、亜愛一郎、朝吹里矢子、御手洗潔

、法水麟太郎、大心地（おおころち）先生、荊木歓喜、伊集院大介、矢吹駆（かける）、

滝連太郎、浅見光彦、迷犬ルパン、三毛猫ホームズ、吉敷竹史（よしきたけし）、タロッ

ト日美子、物部太郎。こういった探偵の末席に、いまにボクの名前も連なるんです。

館 「たいした自信ですね。

真理菜 「あつ、そうだ。館先生のシリーズに出てくる雨森修理がまだいた。

館 「それを忘れてもらっちゃ困るな。（笑い）

豊川作造がブランディらしきものを持って登場。

虹子もその後について出てくる。

豊川作造 「盛り上がっておいですね。ただいま、当ホテルのオーナーからのサービスで

、コニヤックのカミュ・ブックをお持ちいたしました。食後のお酒に最適でございます。

どうぞ、お召し上がり下さいませ。

虹子「お口に愛いますか、どうですか。

溝口「ブックとは豪勢だな。

邑久手「なんですか、ブックって？

溝口「お前は飲むな。お前なんぞにや、国産のブランディで充分だ。

真理菜「ボクも少しもらおうかな。

笹木「お嬢さま、駄目ですよ。

真理菜「何いってんのよ。探偵はブランディグラスを傾けて、推理の思索を練るのよ。

笹木「でも、未成年でしょ。

真理菜「ここは治外法権よ。

館「まあ、少しくらいなら大目にみてあげましょうか。

真理菜「さすが、作家は物分かりがいいわ。ねえ、豊川作造さん、注いでよ。

豊川作造「はいはい、では少しだけ。

真理菜「豊川作造さんは、ミステリーを読んだりするの？

豊川作造「はい、少しなら、はい。

真理菜「何が面白かった？

豊川作造「はあ、私はフィルポッツの『赤毛のレドメイン家』ですね。

浅田「なかなかロマンチストですね。

豊川作造「いやあ、はい。(照れる)

館「お嬢さんは何がお気に召しているのかな？

真理菜「古典では、ガストン・ルルーの『黄色い部屋の秘密』日本のものでは『虚無への

供物』かな。

浅田「私はロマンチックという点でも、安吾の『不連続殺人事件』が好きですね。

真理菜「なんだ、あれは、クリステイの『ナイルに死す』の真似じゃないの。

邑久手「しかし、『不連続』は閉ざされた山荘ものでしょ。

真理菜「嫌いだとはいってないわ。要するに、トリックもシチュエーションもネタがつき

てる感じなのよ。実をいうと、ボクはもう飽き飽きしてるのよ。虚構でなくて、ホンモノ

が欲しいな。たとえば、ここに死体がひとつ転がっていれば、どんなに面白いか。

二階でガシャンという、物の壊れる音がして、階段を早足で誰かが降りてくる。

リツだ。顔色が悪い。

豊川作造「どうしたんですか、リツさん。

虹子「どうしたの？

リツ「(虹子に耳打ちする)

虹子「春奈が！・・・(よろめく)

豊川作造「(虹子を抱き止めると) どうしたんです。

リツ「お部屋で、春奈さんが、死んでるんです。

豊川作造「ええっ！

それぞれ驚嘆の声を発する客たち。

伊達「おい、少女探偵くん、どうするね。御希望どおり、死体が出てきたぜ。

次第に紅潮する三谷真理菜の顔。

5

場面は二階の春奈の部屋。

ベッドにうつ伏せになって、苦悶の表情を枕に埋めている春奈。その枕に、おそらく吐瀉
したらしい血液が飛び散っている。

全ての登場人物がそこに集まっている。

笹木「(脈をとってみる、それから、瞳孔を調べて) お亡くなりになっています。

浅田「分かるんですか？

笹木「私、本職は看護婦です。

浅田「看護婦さんでしたか。

館「死因は何かな。

笹木「そこまでは。

真理菜「毒殺だわ。

館「毒殺？

浅田「何故、分かるんだ、そんなことが。」

真理菜「外傷がみられず、皮膚の色が変色しているもの。何か特種な毒物よ。」

館「紫斑が滲んでいることは、間違いないが。」

近藤「じゃあ、毒殺ですか？」

館「変死というヤツに間違いはないだろうな。」

溝口「まさか、そんなバカなことがあつてたまるか。」

邑久手「バカなことつて、何です？」

溝口「いや、何でもない。つまり、こんなところで、殺人なんかが起こつてたまるもんか

と、俺はそういう意味で。・・・

浅田「ともかく、変死なら、警察に届けなくてはいけませんね。」

豊川作造「リツさん、あんたが最初に発見したんだね。どんな具合だったんだ。」

リツ「私、御食事の時間のお知らせに参りました。それが、なんの返事もなさいませんの

で、妙だなと思ひまして、身体に触ってみましたら、こんなふうで。」

豊川作造「鍵は開いてたのかい。」

リツ「はい、開いてました。」

豊川作造「私が来たときは、中から鍵をおかけになつたのに。」

虹子「春奈・・・（抱き起こそうとする）」

真理菜「ああ、死体に触れちゃ、駄目よ。」

子牛田「おい、さつきから、いったい、君は何者なんだ。」

真理菜「探偵よ。」

子牛田「探偵?・・・面白くないジョークだな。

真理菜「ちよつと、黙って。(死体の顔を覗き込んでいる)

子牛田「何だと。

真理菜「へーえ、おかしな死体だなあ。

子牛田「おい、失礼なことをいうな。

真理菜「ほら、みてください、彼女の顔。

みなさん、覗き込む。

邑久手「どうかしたんですか、顔が。

真理菜「まったく化粧してないのに、口紅だけつけてるの。枕カバーについた血液で、分

からなかったけど、ほら、彼女の唇、血とルーージュの両方で赤いのよ。

ユキ「あら、ほんとだ。

子牛田「ふん、私には、みえないがね。

真理菜「あつ、これよ。(と、ハンケチを出して床に落ちてあつたらしい口紅を拾いあげ

る)この口紅、これ、誰のですか?

浅田「誰のかって、この(死体の)女性のものじゃないの。

虹子「ああ、それは、たぶん私のものです。妹はよく私のルーージュを使ってたんです。

真理菜「さあ、それはどうかな。この死体のお嬢さんのものでないことは確かだけど。

館「彼女のものではないって、何故、それが、君に分かるんだね?

真理菜 「イニシャルよ。キャップにイニシャルが刻んであるのよ。

虹子 「イニシャル？

真理菜 「ええ、R・H・・

子牛田 「じゃあ、オーナーのものでもありませんな。

真理菜 「この方は春奈さんていきましたよね。でも、大場っていうんでしょ、苗字。だっ

たら、R・Hじゃおかしいわよね。

虹子 「・・・R・H・・・（少しよろめいた）

豊川作造 「虹子さま、しつかりなさいませ。おい、リツさん、虹子さんをお部屋に。

リツ 「はい。

リツに連れられて、虹子、去った。

真理菜 「誰ですか、この口紅の持ち主は？

サリー 「ちよつと、いいですか。

真理菜 「直接接触っちゃ駄目よ。（ハンケチにのせて、口紅を渡す）

サリー 「ねえ、どう思う？

ミッチー 「私でもないわ。

土岩フーコ 「あたしんでもないわよ。

真理菜 「返して下さい。

サリー 「あれ？これ、変。

真理菜「変？何が。・・・

サリー「ほらほら、ほら。

ミッチー「あつ、ほんと。

子牛田「おい、何が変なんだ。

サリー「キャップについてる色と中身の色が違うんです。

ミッチー「キャップはピンクなのに、中身は紅（あか）色だわ。

土岩フーコ「キャップと中身が違うんだ。

真理菜「ともかく、（と、口紅を取り上げて）持ち主がこの中にいないのなら、導かれる

答えはひとつよね。でしょ、館先生。

館「いや、私には分かんね。

真理菜「やだあ、しっかりしてくださいよ、ミステリ作家なんだから。毒ですよ。毒はこ

の口紅に付けられ、それを春奈さんは、唇に塗ったんですよ。

館「ほほう、そりゃ、面白い話だな。

近藤「先生、面白がってもらっちゃ困ります。

浅田「ともかく、警察を呼ばなくては。

豊川作造「はい、そういたします。医者も、呼んだほうがよろしいでしょうね。（部屋の

電話器を取り上げる）

伊達「ついでに坊主もな。

子牛田「おい、つまらぬジョークはよせ。

邑久手「あ、あのお。

ユキ「なによ。」

邑久手「いや、その、これがその、毒殺ですか、その殺人ということになるとしたらです

よ、

ユキ「なによ。」

邑久手「いや、そうすると、他殺ってことになれば、当然、犯人がいるんでしょね。」

館「あたりまえじゃないか。」

邑久手「とすると・・・」

皆、おし黙ってしまふ。

館「ここには、これだけしか人はいないと、いうことになるよ。・・・ほほう。」

豊川作造「(ガチャガチャと電話をいじるが) 変ですね。」

子牛田「どうしたんだ。」

豊川作造「通じないんです。下の電話でかけてまいります。」

子牛田「雪上車を出したほうがよくはないか。」

豊川作造「いえ、外は吹雪いておりますし、夜は危険ですから。」

子牛田「じゃあ、おい、この死体、おい、なにか、ここに、その。」

豊川作造「とりあえず、下の電話で連絡をして、夜が明けましたら、何とか。ここはみな

さま、もうお引き取り願いますでしょうか。」

伊達「外は吹雪、家ん中には、死体がひとつか。」

ユキ「やだわ、もう。」

それぞれ、部屋を出ていく。

豊川は、キヨロキヨロと捜しものでもしているふうだ。

真理菜「どうしたの、豊川作造さん。」

豊川作造「いえ、別に。」

真理菜「何か捜してるみたいだけど。」

豊川作造「はあ。いやあ、その、ラジオがこの部屋にも見当たらないもんですから。」

真理菜「ラジオ?・・・」

6

一階のフロア。テーブルをはさんで、邑久手と西ユキが飲んでいる。

邑久手「うーん、よく分からないなあ。」

ユキ「どうしたのよ、考え込んだりしちゃって。あんたらしくもない。」

邑久手「俺だって、たまには、頭も使うさ。」

ユキ「そうね。頭とオチンチンは生きてるうちに使えよね。」

邑久手「茶化すんじゃないや。」

ユキ「何、考えてんのよ。

邑久手「あの、口紅なだけでさ。

ユキ「なによ、あんたも探偵ごっこしてんの？

邑久手「あの口紅が凶器なんだったら、犯人はR・Hかな。

ユキ「やっぱり、いくら頭使っても馬鹿はバカね。そんな証拠になるようなもの、犯人さんが置いておくわけがないじゃない。あーあ。

邑久手「だろっ。だから、俺も変だっていつてんだよ。なのに、あの少女探偵くんは、どうしてあの口紅が毒だって決めつけたのかな。

ユキ「そうよね、変ね。でも、

邑久手「でも？

ユキ「ただの探偵ごっこだったりしてね。ふふふ。

邑久手「もっと変なのは、あのオーナーだな。

ユキ「虹子ってひと？

邑久手「R・Hって聞いて、失神しそうになるんだもんな。

ユキ「分かった。

邑久手「え？

ユキ「血液型がR・Hマイナスなんだ。

邑久手「冗談じゃない。

ユキ「でも、キャップと中身が違うって変よね。まあ、私もごくごく稀に、間違えることもあるけどさ。

と、笹木が通りかかる。 邑久手とユキに軽く会釈して、去る。

ユキ「あのひと、あの少女探偵さんの付き人でしょ。

邑久手「みたいだな。

ユキ「なんだか、陰気なひとねえ。あれで、看護婦やってたのかしら。

邑久手「看護婦ってことは、あの少女探偵は、病気なのかな。

ユキ「病気っていえば、監督、変じゃない？

邑久手「そうそう、俺もいまそれをいおうと思ってたんだ。

ユキ「急に青い顔してさ。

邑久手「ほんとにここで、映画撮る気かなあ。

ユキ「もう寝たのかしら。

と、その溝口がヌツと現れる。

溝口「誰が病気だって？

ユキ「あら、監督。

溝口「てめえら、ちよつと目を離すと、俺の悪口か。

邑久手「そ、そんなことありませんよ。

溝口「そんなところで、こそこそ、何話してんだ。

邑久手 「ですから、その、さっきの死体について、

溝 口 「そうか。（と、変に神妙に）・・・どうなってんだろうなあ。こういう偶然というのはあるんだなあ。

邑久手 「何ですか、偶然って。

溝 口 「あのな、俺が急に変になったようにみえたのはな、実は、・・・おい、酒。

邑久手 「あつ、はい。（酒を渡す）

溝 口 「実に奇妙な偶然なんだがな、今度企画している本編の映画なあ、

邑久手 「『雪に血は踊る』ってヤツですか。

溝 口 「そう、それ。あのシノプシス、つまりシナリオの準備稿でいくとな、まず、ホテルの娘が毒殺されるんだ。

邑久手・ユキ 「ええーっ！

邑久手 「監督、まさか。

溝 口 「馬鹿、いくら酔っぱらっても、人殺しなんかするかよ。

ユキ 「だからなの、青い顔してたの。

溝 口 「そりや、そうだろ。こつちが、考えたシノプシスの通りにひとが死んだんだ。おっかなビックリだぜ。

邑久手 「そのシノプシス、誰かに喋ったりしたんですか。

溝 口 「まあな、そりや、ないとはいえないけれど、しかし、ここにいる従業員やら泊まり

客が、そんなこと知ってるわきゃないだろ。知ってたからって、その通りに人殺しなんかするわけないだろ。

ユキ「そりゃ、そうよね。」

邑久手「あの、ひよっとして、招待してくれた虹子さんとかに。」

溝口「ありゃ、初対面だ。」

ユキ「あの方、どうして、私たちなんか招待してくれたんです？」

溝口「よく分からないんだ、それが。まあ、こっちにとつては、渡りに船ってところなんだけどな。」

邑久手「企画のシノプシスを喋った相手って例えば？」

溝口「俺が企画を持ち込んだ代理店の昔馴染みの部長くらいかな。あとはまあ、酒の席で、チラッと小出しにしたことはあったけど、それは問題外だろう。」

ユキ「で、・・ねえ、次は誰が殺されるの？」

溝口・邑久手「えっ？」

ユキ「違うわよ。監督が書いた荒筋の中での話よ。」

溝口「びっくりするじゃないか。そうだな、ああ、次か、次はその娘の姉だ。」

邑久手「じゃあ、あの虹子っていうオーナーですか。」

ユキ「あら、あの二人、姉妹なの。」

邑久手「そう。」

ユキ「相変わらず、そういうことって、すぐ聞き出すのね。スケベ。」

邑久手「さつき、死体を妹だっけ呼んでたじゃないか。」

ユキ「あっそうよね。」

溝口「おいおい、ちよっと待てよ。俺のは作り話なんだからな。映画のシノプシスなんだ

からな。偶然の一致でやつだ。ここにそういう姉妹がいたのは、あくまで偶然だ。
ユキ「偶然の一致で、あの虹子つてのが、殺されなきやいいけどね。
溝口「おい、何をいうんだ、てめえは。」

と、真理菜が現れる。

真理菜「あれれ、あなた方も眠れないんですか。」

邑久手「ええ、まあ。」

真理菜「それで、犯人が誰だか、推理してるんでしょ。」

邑久手「ええ、まあ。いや、そういうことでも……。」

真理菜「大丈夫よ。犯人くらい、ボクには見当つてるから。」

邑久手・ユキ・溝口「ええ？」

真理菜「犯人は幽霊よ。」

ユキ「なあんだ。」

真理菜「ははははは。といつても、ほんとうの幽霊なんかじゃないわ。ははははは。」

ユキ「どういうことよ、それって？」

真理菜「ボクはちよつとマネージャーに用事があるんだ。」

真理菜、引っ込んだ。

館と近藤がやってくる。

館 「(溝口たちに、会釈して) やつてますね。

溝口 「飲まなきや、やつてられませんよ。

館 「近藤くん、我々も一杯やるか。

溝口 「じゃあ、御一緒にどうぞです。

館 「そうだね。じゃあ、お仲間に入れてもらうか。

近藤 「(グラスをとってくる)

館 「いやはや、大変なことになったな。

近藤 「こんなことならうとは、ですね。明日おもどりになりますか？

館 「そうもいかんだろう。警察沙汰になるのに決まってるからな。事情聴取されるに決まってるよ。まあ、これもいい経験だと思えばよろしい。

近藤 「でも、まさか、ほんものの死体が出てくるとはねえ。

館 「滅多に出来ない経験さ。

溝口 「館さんは、ミステリ作家とお聞きしましたが、どうなんですか？

館 「どうって、さっきの事件ですか？

邑久手 「ほんとに毒殺なんですか？

館 「さあねえ。私のようなモノ書きは、いわゆる『講釈師みてきたような嘘をつき』の輩ですからね。ただ、毒殺ならば、さっき、その彼がいったごとく、おそらく犯人というのが、ここに居合わせた連中の中にいるんでしょうね。

ユキ 「じゃあ、その毒殺魔と、夜をとにもにするわけえ。あく嫌だ。

館 「またとない経験じゃないですか。実をいうと、私はね、こういうホテルでなら、ミス

テリ小説の定石である、閉ざされた山荘というシチュエーションの物語が書けやしないかと、そう思っただけでやってきました。こういう不謹慎なことをいうのはなんですが、願ったこと叶ったりといったところですよ。

真理菜が豊川作造とともに現れる。

溝口や館たちとは別の隅に、真理菜は豊川作造を誘う。

豊川作造 「お話といますか？」

真理菜 「簡単なことなの。ああ、その前に電話は通じたんですか？」

豊川作造 「電話線が切れたらしいですね。雪のせいかと思いましたが、何か鋭利な刃物で

切断されておりました。

真理菜 「へーえ、そうですか。たぶん、そんなことだろうと思ってたけど。鋭利な刃物か

。そういえば、春奈さんは登山用のナイフを持ってたな。

豊川作造 「厨房には包丁もごさいますから。で、私にお聞きになりたいこととは？」

真理菜 「春奈さんと虹子さんは御姉妹でしたよね。

豊川作造 「そうです。

真理菜 「春奈さんて誰かに恨まれたりしてましたか？」

豊川作造 「さあ、我が儘な性格の方でしたが、ふつうの明るいお嬢さんで、恨まれるよう

なことは、さあ、どうでしょう。

真理菜 「春奈さんは、ずっと部屋にいらしたんですね。

豊川作造 「ええ、そうです。

真理菜 「中から鍵をかけてでしょ。

豊川作造 「ええ、左様です。

真理菜 「賄いのリツさんは合鍵を使ったわけじゃないでしょ。

豊川作造 「リツさんが部屋に行ったときは、開いていたようですね。

真理菜 「ふーん。・・・R・Hのインシヤルに心当たりはありませんか？

豊川作造 「ございません。

真理菜 「外との連絡はとれますか？

豊川作造 「明日、夜が明ければ、雪上車で町まで出向くつもりです。

真理菜 「ここにはスキーはないんですか？

豊川作造 「ございますが、地形が悪いので、危険でございます。私どもも使ったことはあ

りません。櫓のようなものも、雪遊びに使う程度のものでしたら、ございますが、とても

遠出はできません。

真理菜 「虹子さんというオーナーが誰かから恨まれているようなことは？

豊川作造 「えっ？・・・どうということございません。

真理菜 「口紅です。犯人はおそらく虹子さんを狙ったんです。

豊川作造 「ええ！

溝口たちも、耳がダンボになる。

真理菜 「キャップはともかく、中身は虹子さんのルージユですよ。ですから、次の犠牲者

はきつと虹子さんですよ。

豊川作造 「そ、そんな。

と、笹木が来た。

笹木 「お嬢さま、そろそろ。

真理菜 「はいはい。じゃあ、ねえ。

二人、去った。

茫然としている豊川作造。

邑久手が彼に近寄って。

邑久手 「ねえねえ、マネージャー。

豊川作造 「えっ？あ、はい。

邑久手 「電話線切られてたんですか。

豊川作造 「ええ、どういう悪戯でしょうか。

邑久手 「悪戯だといんだけど。

豊川作造 「明日、修繕いたします。

邑久手 「他には変わったことはないでしょうね。

豊川作造 「御不便をおかけいたしますが、明日まで、何とか御辛抱を。

邑久手 「いやいや、変なことはないかって聞いているんです。

豊川作造 「変なこと？

邑久手 「電話線以外に。

豊川作造 「さあて・・・ああ、ラジオが無くなりました。

邑久手 「ラジオ。

豊川作造 「当ホテルに一台きりのラジオです。

邑久手 「へーえ、ラジオですか。

溝 口 「(席から、声をかける) おい、雪上車は大丈夫なんだろうな。

豊川作造 「はい、これから点検をいたしますが。

館 「(同様に) スキー板もいざという場合に備えて、使えるようにしておいたほうが、良

くはないかな。

豊川作造 「そうでございますね。

邑久手 「外はまだ、吹雪いてますねえ。

豊川作造 「はい。

邑久手 「ああ、あの、春奈さんですけど、耳にしたところによると、マネージャーが行か

れた時は、中から鍵をおかけになったんですよね。

豊川作造 「はい。

邑久手 「そのとき、彼女と何か喋ったりしました？

豊川作造 「いいえ、ただ、ガチャリと。

邑久手 「そいで、女中のリツさんが行かれたときは開いてたんですよね。

豊川作造 「らしいです。

邑久手 「変だなあ。すると、春奈さんは、マネージャーがもどってから、また鍵を開けら

れたんですよね。

豊川作造 「きつと、私に意地悪をなさったんでしょう。

邑久手 「貴方以外、春奈さんの部屋に行かれた方はありますか？

豊川作造 「オーナーが。

邑久手 「そのとき鍵は？

豊川作造 「閉じられていたようでございますが。

邑久手 「当然、妹さんの名前を呼べますよね。お姉さんが声をかけられても開けられな

かったドアが、リツさんが行ったときは開いてたのか。うーん、何故、彼女はドアの鍵を

開けてから死んだんだろ。

館 「(座っている席から) 誰かが訪ねてくるのを待ってたんじゃないのかねえ。

邑久手 「そう、そうなんですよ。それ、考えてみたんですよ。つまり、彼女は誰かを待つ

てて、ドアに施錠しなかったんですよね。ということは、

館 「誰でも彼女の部屋に入れたことになるな。

邑久手 「そのとおりです。でも、どうして、虹子さんが訪ねられたときにも鍵はかかって

いたんでしょう？これ、変ですよ。

館 「たしかに。

ユキ「開けるの、忘れたんじゃないの？」

邑久手「かもね。いやいや、そうじゃないな。もうひとつ可能性があるぞ。

ユキ「可能性って？」

館「ふむふむ、なるほど。そういうことか。

邑久手「いやあ、さすがに作家先生には、もうお分かりですか。

館「たぶん、春奈とかいう娘の部屋に、もうひとり誰かいたんだろ。

邑久手「そう、そうです。

ユキ・溝口・近藤「ええ！？」

ユキ「じゃあ、犯人が？」

邑久手「そこまではちよいと分からないけどね。

館「春奈という娘は鍵を開けたままにしていたんだが、その誰かさんが、豊川さんと虹子

さんが訪れた時には部屋にいて、鍵をかけたんだな。そのとき、果たして春奈嬢は生きて

いたのか、死んでいたのか。・・・

豊川作造「私、雪上車の点検と、スキー道具のほうをみてまいりますので。これで。

邑久手「どうも。・・・

ユキ「ねえ、あの少女探偵、次の犠牲者は虹子さんだっていつてたけど、大丈夫？

邑久手「まさか。

と、悲鳴が聞こえる。

邑久手 「あれは？」

豊川作造 「虹子さまのお部屋のようです。

溝 口 「おい、そのままかだぞ！」

みなさん、立ち上がるが。

急に停電する。

ユキ 「何よこれ。

邑久手 「停電ですか？」

また、叫び声。

豊川作造 「虹子さまの声です！」

邑久手 「いきましよう。何処です、彼女の部屋は？」

館 「マネージャー、懐中電灯だ。ともかく、何か明かりだ！」

7

暗闇の中、ドアを叩く音がする。

真理菜 「虹子さん、どうしました！」

子牛田 「おい、どうしたんだ。誰だ、どこにいる。

真理菜 「ボクだよ。ドアの前よ。真っ暗なの。停電よ。

子牛田 「他の連中に知らせなきや。私が行こう。停電でも暗闇でも、私にとっちゃ一緒だからな。(行く)

浅田 「何です、何があったんです。電気はどうしたんです。誰かいるんですか？
真理菜 「ボクです。

他の連中も暗闇の中を手探りでやってきたらしい。

「どうしたんだ」「悲鳴が聞こえたぞ」などというギャが聞こえる。

浅田 「懐中電灯はないんですか。

邑久手 「いま、豊川さんが持つてくるはずです。

真理菜 「ドアを破りましょう。

溝口 「そうだな、そうしよう。

邑久手 「いいですか、1、2、の三でいきますよ。

で、ドアが破られると、明かりが灯る。

ベッドと、その下に横たわる虹子。

踊子たちの悲鳴。

豊川作造が懐中電灯片手にかけつけて。

豊川作造 「虹子さま。（抱き起こそうとする）

真理菜 「駄目よ。触っては駄目。

邑久手 「電気、どうしたんですか？

豊川作造 「ブレーカーが落とされてただけです。

真理菜 「（部屋の中を歩きまわって）何ですこれは？

ベッドの上から取り上げたモノは踊子の衣装だ。

近藤 「藤子さんの衣装のようですね。

真理菜 「誰のモノですか？

ミッチー、サリー、土岩フーコ、口々に否定。

子牛田 「じゃあ、春奈さんのか？

ミッチー 「違うわ。

子牛田 「オーナーが昔着ていたモノかな？

真理菜 「違うわよ。

子牛田 「なんで、分かるんだ？

真理菜 「このコスチュームにも、イニシャルが刺繍してあるわ。R. H. . .

笹木が遅れてやってくる。

真理菜「笹木さん、虹子さんの容体を。」

笹木「はい。(脈をとるが)・・・お亡くなりになってます。

真理菜「(調べてみて)窓にも中から鍵がかかっている。今度は密室か。

ユキ「やっぱり、毒殺なの？」

真理菜「きつとそうだ。春奈さんのときと同じだ。紫の斑点が浮き出ている。

溝口「おい、もうグズグズしている暇なんかないんじゃないか。

豊川作造「分かりました。夜道は危険ですが、悠長なことはいってられません。すぐに、

麓の警察に連絡をとりに行きます。

真理菜「待つて。

子牛田「何だね、今度は。

真理菜「もし、豊川作造さんが犯人だとしたら、ボクたちはみすみす犯人の逃亡を許すこ

とになるのよ。

みなさん、驚く。

子牛田「豊川、君、犯人か？」

豊川作造「滅相もない。

子牛田 「違うといってるぞ。」

「じゃあ、いいんじゃない」なんてことを声を揃えていう皆さん。

真理菜 「何をふざけたこといってるんですか。雪上車が運転できるのは、豊川作造さんだ

けなんです。この部屋の合鍵を持っているのも豊川さんだし、ブレーカーの電源を落とせるのも、彼が一番簡単だし、電話線だって、彼にならいつでも切断できます。それに雪上車の運転が出来るということは、いつでもここから脱出可能だということです。

豊川作造 「・・・では、どういたしましょう。どうすればよろしいのです。

邑久手 「じゃあ、僕と一緒に行きましょう。それなら問題はないでしょう。

豊川作造 「夜道ですので、そうしていただくほうが、私もありがたいですが。

真理菜 「バカね。どうして無能な警察なんかを、土足で花園に呼び込む必要があるのよ。

館 「いやいや、昨今の警察はさほど侮れるもんじゃないよ。探偵ごっこはこのへんでおヒ

ラキにしたほうが賢明だと思うね。近藤くん、君も一緒にいきたまえ。

近藤 「はい、分かりました。

真理菜 「駄目よ。

館 「いい加減にきなさい。

近藤 「じゃあ、行きましょうか。

豊川作造 「はい、参りましょう。

溝口 「そうだ、こういうことは、警察に任せるのが一番だ。早く行け。・・・ん？どうし

たんだ。早くいかんか、邑久手、何をしてるんだ。

いったん、部屋を出た彼らが手を挙げてもどってくる。

溝口「おい、邑久手。

邑久手「そ、それが。

子牛田「豊川、何をしている。

伊達「うるせえな。ガタガタ騒ぐなよ。警察はちよつと困るんだよ。（拳銃を片手に入ってくる）俺もできれば、こんなことはしたくなかったんだが、しょうがねえや。ねえやは

十五で嫁にいきだ。皆さん、部屋の隅に寄っていたかどうか。

館「何者だね、君は？

伊達「警察沙汰はちよいと御免こうむりたい者さ。その探偵のお嬢さんとは、まったく違う理由でだけどね。ほら、早いところ、隅へ行け。

皆さん、部屋の隅にかたまる。

伊達「豊川作造さん、ここ一日ふつかの間に郵便小包が届いたろ。差し出し人は山田太郎

、受取人は伊達浩二、俺だ。もちろん、山田太郎つてのも、俺のガセだけどね。その中身がちよいとヤバイしろものでねえ。俺は、ここに来る前にヤマをひとつ踏んでるんだ。所持しているとマズイんで、郵便小包にして、ここに送ったんだ。ここなら、安全だと思っ

たんでねえ。いやあ、面も割れてることだし、ここで、しばらくほとぼり冷ましてから、トンズラするつもりだったんだけどねえ、この騒ぎだ。こりゃあ、マズイよ。

邑久手「そうか、ラジオがなくなっただってのは、あんたが、

伊達「ラジオなら、ここにあるさ。独占的に聞いてたよ、俺が、ニュースをね。(と、ラ

ジオをベッドの上に投げる)ともかく、俺はこんな騒ぎに巻き込まれるのは御免だな。おい、豊川作造さん、小包を持ってきてもらおうか。俺は一足先におさらばするから。

豊川作造「その郵便小包でしたら、局のほうから連絡はありましたが、あいにく、私、取

りにいくのをうっかりしておりまして……

伊達「配達してくれなかったってのかい？」

豊川作造「あいにく、こんな雪の深い山の中までは、毎日配達は。

伊達「なるほどね。じゃあ、郵便局にオネンネしてるってことか。まあ、いや、明日に

なったら、郵便局まで御同行願うか。どうだ、なかなか物分かりがいいだろ。さてと、そうと決まったら、退屈しのぎだ。どのみち、明日までは退屈だろうから、俺がひとつ余興を提供してやろう。俺は昔っから、探偵小説なんていうまだるっこしい読み物は大嫌いだねえ。インテリの探偵もハイエナ刑事も性に合わないんだ。だから、ここは俺なりの方法で解決してやろうじゃないか。

真理菜「解決って、何をする気？」

伊達「だから、少女探偵さんになっちゃって、犯人を捜してやるってのよ。

真理菜「何だって！」

伊達「このホテルに居合わせたのは、これで全員だな。ようしよし、ということほだ、こ

の中に、その毒殺犯人くんがいるってことだな。間違ってるかい？

館 「理屈のうえではその通りだね。

真理菜 「何をしようというの？

伊達 「おい、その踊子の姉さん、そう、お前だ。こっちへ来な。

いわれて、ミッチーが行く。

伊達 「お利口にしてりや、何にもしないさ。(と、彼女の腕をとって)

ミッチー 「キャツやめて。

伊達 「静かにしろよ。俺だって、いつ紳士をやめて狼に化けるとも限らないんだ。さて、

諸君。名探偵みんな集めてきてといい、なんて川柳もあるくらいだが、どうだ、教養ある

だろ。へへへ。さて、諸君。諸君の中に犯人がいることは分かった。そこで、だ。おい、

犯人は手を挙げろ。

真理菜 「無茶な。

伊達 「無茶なもんか。いいか、五つ数える間に手を挙げない場合は、この踊子さんの耳た

ぶが千切れて飛ぶぜ。

ミッチー 「やめてえ〜！

真理菜 「やめろ！

伊達 「ひとつ。

溝口 「キチガイか、君は。

伊達「ふたつ。」

土岩フーコ「ねえ、誰が犯人なのよ。助けてあげてよ。ミッチーは関係ないんでしょ。

伊達「みつ。」

邑久手「おい、少女探偵くん、君は犯人の目星がついてるようなことを、いったたじゃな

いか。

伊達「よお。」

館「こんな展開のミステリを書いたら、読者にお叱りを受けるな。

伊達「いつ。」

と、伊達は天井に向けて、拳銃を撃つ。叫びと悲鳴の中、しゃがみこむ皆さん。

伊達「なかなか、根性のあるヤツだな。ようし、じゃあ、俺のほうで譲歩してやろう。い

まここで名乗り出るのがイヤなら、俺はこの女と下のフロアにいる。一杯やってるから

つでも来な。雪上車なんかでトンコしやがったら、この姉さんの命はないよ。ハハハハ。

では、犯人くん、待ってるよ。

ミッチーを連れて、伊達、去る。

溝口「な、何なんだ、まったく。

邑久手「豊川さん、表のフロアを通らずに雪上車までは行けますか。

豊川作造「ええ、裏口から。でも、エンジンをかけてから10分近く待たないと、車は走りません。」

溝口「いったい、どうすれば、いいんだ。前門の虎、後門の狼とはまさにこれだ。」

子牛田「おい、少女探偵、何で黙っている。お得意の推理で犯人を突き出したらどうだ。」

真理菜「笹木さん。」

笹木「は、はい。」

真理菜「部屋にもどるよ。」

笹木「はい。」

子牛田「えっ？おい、こちら。」

二人、去った。

ユキ「ちよつとお、どうなるのよ。」

邑久手「まさか、こんな展開になるとはねえ。」

溝口「俺のシナリオにも、こんなシーンはないぞ。」

ユキ「もう、大の男がこれだけいて、何とかなんないの？」

邑久手「だって、相手はピストル持ってんだぜ。」

ユキ「三人くらいで一緒に飛び掛ければいいじゃない。一人撃たれている間に後の二人で助けるのよ。」

溝口「そりゃいい。邑久手くん、主役をやるぞ。撃たれる役、君だ。」

邑久手「馬鹿いわないで下さい。映画じゃないんですからね。死んだらお終いですよ。

館「しかし、誰かが出ていって、相手を油断させるって手段はあるな。

子牛田「そりゃあ、いい。おい、ドガン、お前出ていけ。

土岩フーコ「嫌よ。

子牛田「ミッチーを助けたくないのか。

土岩フーコ「そんなら、子牛田さん、あんた、やりなさいよ。

子牛田「馬鹿な。こんなメクラに何ができるもんか。

土岩フーコ「何よ、意気地無し。

豊川作造「そのオトリには、私になりました。しかし、いままぐは危険でしょう。一杯

やっているとかいつてましたから、あいつが酔い潰れたところをやりましょう。

子牛田「おお、そりゃあいい。しかし、私はメクラですからな。この企てには役に立ちそ

うにありませんな。イチ抜けさせていただきますよ。うまくいったら知らせて下さい。部

屋におりますから。えーと、ラジオ、ラジオ・・・（手探りでベッドのラジオを取ると）

こういうときには、音楽と酒だ。（そそくさと去る）

土岩フーコ「役たたず！

邑久手「じゃあ、残った皆さんで作戦を。

豊川作造「そのまえに、虹子さんを。

と、虹子をベッドに寝かせて、シーツをかける。

溝口「まったくヒデエ夜になったもんだな。

近藤「たいへんな旅行になりましたね。

館「そうとも限らんさ。仏さんには悪いが、こんな経験は滅多に出来ることじゃない。

邑久手「(さっきのドレスを持ち上げて) 何なのかな、こいつは。R. H. . . .

館「ミステリイだね、まったく。

と、いままで台詞のなかった、いや、沈黙を守っていた三崎小鈴が、

三崎「そのドレスは、私のものです。正確に言えば、私の姉の形見です。

一同「(怪訝に) ええ？

三崎「六年前にあった事故で死んだ、姉の形見なんです。私が持参したものです。R. H

はヒロ・麗子という姉の芸名のイニシャルです。

邑久手「すると、あの口紅も。

三崎「はい、あのルージュのキャップはたしかに私の姉のものです。ただ、その方(溝口

)に狼藉を働かれたときに、フロアで紛失しましたけど。

溝口「あ、いやあ、あのときは、どうも、はい。

ユキ「えく、じゃあ、まさか、あなたが。

三崎「(黙って、頷く)

館「これは、少しばかり、話し合ったほうがよさそうですね。

フロアのロビーで、伊達がウイスキーを飲っている。
その傍らで震えているミッチー野村。

伊達「なんだ、怖いのか。

ミッチー「いいえ、寒いんです。

伊達「暖房が故障しているようには思えないが。一杯やるかい、温まるぜ。

ミッチー「要りません。

伊達「そうかい。朝までには、まだ間があるからな。飲み過ぎで寝てしまうわけにもいかないからな。に、しても、犯人のヤロウ、遅いじゃないか。

と停電する。即座にライターを点ける伊達。

伊達「と思ったたらこれか。おいおい、小細工はよしたほうがいいぜ。

足音が近づいてくる。

伊達「ほほう、犯人さまの御登場か。へーえ、犯人はあんたか。まあ、毒殺ってんで、女が犯人じゃないかなとは思ってたんだがな。どうだい、お近づきのシルシに一杯。

と、急に表のドアが開いて、吹雪が流れこむ。ライターの火が消える。

伊達「野郎、ふざけた真似しやがって。

暗闇に銃声！女の悲鳴、伊達の叫び声。二階から降りてくる多数の足音。

邑久手「豊川さん、ブレーカーを。

電灯が点る。足にナイフを突きたてられて、のたうってる伊達。その反対側で腕を押さえ
て身悶えている笹木。

邑久手「(床に転がった拳銃を拾うと、笹木を抱き起こして) しっかりして下さい。

笹木「申し訳ありません。犯人は私です。私がみんなやっただんです。

サリーと土岩フーコが、ミッチーを抱える。

サリー「大丈夫、ミッチー。

土岩フーコ「しっかりしてよ。ミッチー。

邑久手「豊川さん、雪上車を。エンジンを。

豊川作造「分かりました。（出ていく）

邑久手「（ハンケチを笹木の腕に巻く）カスリ傷です。たいしたことはありません。

笹木「申し訳ありません。

溝口「おい、そいつ（伊達のこと）を縛ってしまえ。

近藤と浅田、適当なロープを出してきて、伊達を縛る。

邑久手「笹木さん、あのお嬢さんは、何処です。

笹木「お嬢さまは、何も関係ないのです。

子牛田がラジオを片手にやってくる。

子牛田「犯人は誰だ。えく？あのヤクザ者はどうなったんだ。

伊達「（唸る）痛えよう。

子牛田「（伊達にステッキを振るう）こいつか、こいつめ、このヤロウ。

土岩フーコ「やめなさいよ、みつともない。

子牛田「犯人は誰だったんだ。春奈さんと虹子さんを殺した犯人は？

と、黄金バットを髣髴とさせるような高笑い。あの少女探偵が現れる。

真理菜 「犯人なら、いまボクが教えてさしあげます。この閉ざされた山荘に起こった殺人

劇も、幕を下ろすときがやってきました。いま、すべて、ボクが説明いたします。よろしいですか、皆さん、いまボクがその推理を披露してごらんに入れます。

と、豊川作造が飛び込んでくる。

豊川作造 「雪上車のガソリン・タンクに穴が開けられています。ガソリンは全部、雪の上

です。スキー板もみな、壊されております。

邑久手 「何がなんでも、閉ざされた山荘にする気だな。

真理菜 「静かに。皆さん、これからが一番いいところなんです。探偵が登場人物を一同に

集めて明晰な推理を披露する、クライマックスなんです。

子牛田 「まだ、そんなことをいつてるのか。

真理菜 「おだまりなさい！

苦りきった表情で、真理菜を視る、皆さん。真理菜は、興奮のあまり全身を奮わせて、両手を握りしめた。

笹木 「お嬢さま。

真理菜 「ボクは、この瞬間を待ってたんだ。いいですか、皆さん。まず春奈殺しの一件で

す。あれは、殺人ではなく、事故でありました。

子牛田「事故？」

真理菜「ええ、あれは事故でありました。何故なら、犯人は春奈さんを殺そうとしたので

はなく、虹子さんを殺そうとして口紅に毒を塗ったのです。ところが、口紅は虹子さんに使われることなく、春奈さんの手に渡ってしまった。犯人は大慌てで口紅を取り返そうと思いましたが、時すでに遅し。春奈さんは帰らぬひととあいなりました。しかし、犯人はこの事態を逆に利用することにしたのです。それが、現場に残された例のR・Hのインシヤルの入った口紅です。考えてもごらん下さい。凶器である口紅を現場に残すなんて、変だと思われませんか。実はこれこそ、犯人が虹子さんに送ったメッセージであったのです。口紅のキャップを変えることによって、犯人はインシヤルで自分の正体を明かしました。R・Hです。そうして、口紅の中身で死ぬのは、ほんとうは虹子さんのほうであること示唆したのです。虹子さんはショックを受けたに違いありません。R・H、それは虹子さんにしか分からない、恐ろしいインシヤルだったのです。

子牛田「R・Hというのは、誰なんだ？」

春奈「ヒロ・麗子。六年前、舞台の事故で死んだ踊り子です。彼女は大場虹子とともに、あ

るミュージカル映画の主役を最後まで争いました。(ポケットから取り出して) この新聞記事をご覧ください。事故当時の模様が詳しく載っています。この記事によると、ヒロ・麗子は、大場虹子と同じ舞台で稽古をしていた際、あやまって二人で奈落に転落したとあります。この事故でヒロ・麗子は死に、大場虹子は足を傷めたのです。しかし、これこそは事故ではなく、大場虹子による犯罪であったのです。彼女は、殆ど主役に決定しかかっていたヒロ・麗子を事故にみせかけて、殺したのです。この度の虹子さんの死は、ヒロ・麗

子の幽霊による殺人です。

子牛田 「幽霊だと？」

真理菜 「もちろん、そうみせかけただけです。あの、虹子さん殺害の現場にあった踊子の

ドレスはヒロ・麗子さんのものです。そうですね、三崎小鈴さん。いや、ヒロ・麗子さんの妹さんといったほうがよろしいんでしょうか？あなた、昨夜、虹子さんの部屋に忍び込むと、あのドレスを使って、虹子さんを脅しましたね。あなた、ヒロ・麗子に化けたんでしょう。あなたもダンサーなんですよ、きつと。姉さんのドレスを着て、踊ってみせたのよね。妹さんだもの、さぞやそっくりだったに違いないわ。それから無理やり毒を飲ませましたね。虹子さんは、恐怖の中、のたうって死んでいったんですね。

館 「すると、少女探偵くん、昨夜の連続の惨劇は、この三崎小鈴さんの復讐劇だったということかな。

真理菜 「そのとおりです。

子牛田 「では、犯人は。

真理菜 「無論、その女性、三崎小鈴さんです。

館 「普通ならここで拍手喝采というところなんだがね。

真理菜 「何か、疑問な点でもあるんですか？

邑久手 「あの、僕から質問をしていいですか、探偵。

真理菜 「いいですよ。

邑久手 「雪上車のガソリン・タンクに穴を開けたのは誰です。それから、このヤクザ者を

刺したのは、誰です。あのナイフは春奈さんの登山用ナイフですよ。あなた、確か、あ

のナイフを春奈さんがお持ちのこと、知ってらっしゃいましたよね。

真理菜 「そ、それは。」

伊 達 「痛えくよお。」

子牛田 「うるさい（ステッキで打つ）」

笹 木 「それは、私でございます。お嬢さんは、何の関係も、・・・」

真理菜 「笹木さん、黙って。」

邑久手 「もうひとつ、質問です。探偵さん、その新聞記事、何処で手に入れたんです。

真理菜 「これは、その三崎小鈴から盗み出したのよ。」

邑久手 「三崎さんから盗み出したものは、ほんとはあの口紅と、同じくR・Hのイニシヤ

ルの入った踊子のドレスなんじゃないんですか？

真理菜 「何をいつてるの、あなたは？」

館 「真相を語るには、詰めが甘かったようですね、少女探偵。」

邑久手 「実は、先程、この事態をどう打開するか、あなたがお部屋にもどられてから、僕

たち作戦会議をやったんです。そこで、いろいろなことが分かったんです。

真理菜 「何が分かったっていうの？」

邑久手 「まず、今日、ここに集まった僕たちですが、その殆どが招待された客だったとい

うことがです。僕と、溝口、西の三人もオーナーである大場虹子さんに招待されたんです

。もつとも、溝口さんだけが招待されて、僕と西はついて来ただけなんですけど。

館 「そういう招待が私にもあったんだ。静かな環境でミステリの執筆は如何ですかと、ね

。もちろん、招待してくれたのは、オーナーの大場虹子だが。

豊川作造「直接、虹子さまには確かめませんでした。本日のお客さまに招待客の多かつたのは事実でございます。

三崎「私にも招待状が来ました。私の招待状には六年前の事故の真偽について、是非にお

話がしたいとありました。大場虹子さんの名義の招待状でしたけど、虹子さんの態度から察するに、虹子さんは、その件についてまったく知らないようだったんで、不思議な感じはしましたけど。それから、もうひとつ、あなたのもってらっしゃった口紅は、たぶん、このフロアで紛失したものです。踊子のドレスは私の部屋から盗まれたものです。

真理菜「ははは、何をいい出すのかと思ったら、言い逃れしてるつもりなの？

浅田「R・Hのインシヤルの入った口紅もドレスも、彼女が持参したものであるというこ

とは、僕が証人になってもいいですよ。何故なら、それを持ってくるようにと、招待状に記されていたからです。ヒロ・麗子が自分の衣装や持ち物に自身のインシヤルを入れていたことは、当時は有名な話で、週刊誌の記事にもなっていましたからね。

真理菜「あなた、三崎の何なの？

浅田「恋人です。彼女一人で行かせるのは不安でしたから、ついてきたんです。

真理菜「共犯者ね。昨夜、虹子さんの事件の時、電源を落としたのはあなたなのね。

浅田「それは、見当違いですが。六年前の例の事故のことは、僕も知っております。これでも新聞記者のはしくれですからね。

邑久手「分かったことは他にもあります。虹子さんの部屋から、このホテルの売買契約書

をみつけました。『ホテル・ゴールドラッシュ』の所有権はすでに移転していますね。買い主は三谷財閥のある会社ですね。

溝口「もっと分かったことがある。私の映画の企画を採用してくれた代理店も、三谷財閥

関連の会社だということだ。分かったというより、気がついたといったほうが正しい。私の書いたシノプシスでは、雪に閉ざされた山荘で美しい姉妹が殺されるんだが。・・・

邑久手「探偵さん、あなた、確か、三谷真理菜と名乗りましたね。

館「少女探偵くん、君は、この溝口監督の書いた映画のシノプシスを何処で手に入れたん

だね。何処かで、それを手にしたんじゃないのかね。たとえば、その代理店がこの監督の企画を採用したというのは、君が関係していたということはないだろうか。

真理菜「（笑う）ハハハ・・・。それじゃあ、まるで、犯人はボクじゃない。ボクがここ

で、その監督の書いたシナリオ通りに人殺しをしたというの？じゃあ、教えてよ。虹子さんをどうやって殺したの？部屋は中から鍵がかかってたのよ。

館「その程度のトリックは、私のような二流のミステリ作家にも考えられるね。あの時、

最初に駆けつけたのは、停電の暗闇が支障にならない子牛田さんだったらいいんだが、彼に聞いたところ、すでに、そこに君がいたというのだ。というより、声が出たというのだ。しかし、気配がつかめなかったらしい。そこで、「どこにいるんだ」とわざわざ訊ねたらしい。すると「ドアの前です」という声が出た。・・・上からね。こういうホテルには、各部屋にも、廊下にも通風口というのがあってね、それが伝声管としても利用できる。

君は虹子さんの部屋について、彼女の部屋の通風口に向けて、声を発していたんだね。

邑久手「ドアを破ろうといいだしたのも、あなたでしたね、探偵さん。ドアが破られて、

電灯がついたとき、あなた、いままさにその部屋に飛び込んできたふうに、立っていれば良かったんですね。

館 「合鍵を盗むために、わざわざ豊川さん呼び出して、・・・笹木さん、あなたが合鍵

を盗んだり、ブレーカーを落としたり、彼女を助けたんですね。

真理菜 「すると、やっぱり犯人はボクだったか？ハハハハハ。

邑久手 「少なくとも、このヤクザを刺したのは、あなたでしょ。

笹木 「いえ、私です。お嬢さまは、犯人ではありません、

真理菜 「いや、ボクだ。この男を刺したのはボクだ。しかし、それは人質を助けるために

やむなくやったことだ。

邑久手 「それは認めることにしましょう。ところで、僕たちは話し合いました。三崎さん

が御自身のことを名乗って出られてから、まあ、いわゆる推理というヤツを試してみたんです。それで、どうしても納得の出来ないことにぶつかっただけです。それはこの閉ざされた山荘という状況です。吹雪に閉ざされた山荘での殺人事件という設定です。なるほど、ミステリ小説ならそれは充分面白いシチュエーションです。しかし、実際にこんな状況で人殺しなんかしたら犯人はすぐ分かっちゃいますよ。何しろ、これだけしかひとはいないんだから。捜査なんてスグ済んでしまうでしょう。おまけに、三崎さんはあなたのおっしゃる通り、一番犯人と目されて当然の人物です。そんな不利な状況の下で、果たしてほんとうに殺人なんてするんでしょうか。それも突発的でない、計画された復讐劇をですよ。面はワレテますから、逃げようとすれば、僕たちみんなを殺すハメにもなりかねない。ともかく、僕のいいたいのは、いや、そこでの皆の推理の結論というのは、この吹雪の山荘というヤツは、けして犯人にとって有利ではないってことなんです。なのに、事件は起こった。

真理菜 「そうよ。死体が二つもあるのよ。」

邑久手 「そこがどうも、よく分からないところなんです。僕はこう思うんです。犯人は

誰かを殺したかったのではなくて、閉ざされた山荘で殺人事件を起こしたかっただけだったんじゃないかと。動機はそれだけだったんじゃないかと。

真理菜 「すると、全てはボクの茶番だというのね。ボクは茶番で人殺しをしたというの、
そういうのね。」

邑久手 「雪上車のガソリン・タンクに穴を開けたり、電話線を切ったり、スキー板を壊したり、それほどまでに、閉ざされた山荘が作りたかったんですか。」

真理菜 「断っておくけど、ここは、ボクの持ち物だからね。ボクが買ってもらったんだからね。自分のモノをどうしようかと勝手じゃない。」

邑久手 「やっぱり、そうでしたか。あなた、三谷財閥の御令嬢でしたか。いやあ、推理の糸口は、まさにそこにあっただけです。あなた方が、何故、このような山奥の山荘に現れたのか、その疑問から私たちは各々考えを出し合っただけです。そこで、結論として、これは何か用意された探偵小説世界の現場のような感じだという結論に到ったのです。いまだきのコトバでいえば、バーチャルなリアリティ。仮想現実です。」

真理菜 「この山荘は実際にボクのものだ。この世界は現実のボクの劇場だ。」

館 「しかし、ひとを殺してもいいってことはない。」

真理菜 「ボクは殺してなんかいない。」

笹木 「そうです。お嬢さまは、誰も殺してなんかいらつしやいません。」

館 「我々に招待状を出したのは、あなた方ですね。まあ、不意の客も混じってはいました。」

が。大場虹子名義で、私たちを集め、シノプシスに従って、

真理菜「待って。たしかにボクは、父の系列会社の代理店から父が持ってきた『雪に血は

踊る』ってタイトルの簡単なシナリオを読んだわ。それから、六年前の事故だって知ってる。調べたのよ。このオーナーの大場虹子に関係していたから。それで、この山荘も買ってもらった。それから、君たちの何人かを招待してあげた。観客は多いほうが面白いと思ったから。つまり、ボクはそういうミステリの舞台を作っただけよ。けれど、ほんとうに事件は起こったのよ。この事実がまだ分からないの！

邑久手「笹木さん、真実をいってもらえませんか。実は、僕たちもまさか、この少女が人

殺しをするなんて、信じられないんです。いくら彼女にとってはバーチャルな世界の出来事であろうと、事実、二人もひとが死んでますからね。

笹木「・・・では、申し上げます。

真理菜「よせ！

笹木「いいえ、いいじゃございませんか。お嬢さまは、誰も殺めてはいらっしゃらないん

ですから。それは、私がいちばん、よく存じておりますから。ええ、そうでございます。

皆様の見当どおりでございます。お嬢さま、真理菜さまは、とある病気で殆ど寝たきりの生活が続けてらっしゃいました。私が看護をしてまいりました。お嬢さまは殊の外ミス터리がお好きでした。ここ数年やつと普通の生活もできるようになりました。あるとき、何処から手にいれられたのか、ある映画のシナリオと、六年前の踊り子さんの事故の記事を手に入れました。雪に囲まれた山荘が欲しいと、お父上にねだられました。ちょうど、J Rのポスターの片隅に、このホテルのことが出ていたことがありまして、ええ、それは

ずいぶんと前のことなんですが。それで、金に糸目はつけぬ財閥のことゆえ、たやすくそれは実現いたしました。みなさまをお招きし、ここで、お嬢さまは、探偵ゴッコがやれさえすれば、それで良かったんです。閉ざされた山荘というのでございますか、そういう現場があれば、それで良かったんです。ところが、ほんとうに、死体が出てまいりました。まさかとは思いましたが、ほんとうに、死体が。

邑久手 「春奈さんですね。

笹木 「はい。

邑久手 「バーチャルな世界に現実が入り込んだとでも？

真理菜 「バーチャル？違うわよ。ボクはね、勘できつと何かが起こると思ってたのよ。六

年前の遺恨と、雪に閉ざされた山荘、集められた客。そうして、探偵のボク。これだけそろえば、きつと事件が起こると確信していたんだ。ははは、それが、まんまとほんとうに起こったんだ。ボクはホテルに到着すると、早速あちこち、このホテルの間取りやなんかを調べたさ。すると、ある部屋から、そう、春奈さんの部屋から、妙な呻きが聞こえたんだ。ドアは開いてた。ボクはじつと、春奈をみていた。そうしたら、ブルブルって震えながら彼女、死んでしまったんだ。二度ばかり、ドアがノックされたんで、慌てて鍵をかけた。りしたけどさ、ボクの目の前で彼女は死んだんだ。

笹木 「お嬢さまは私を呼びつけられました。お部屋に駆けつけた時は、春奈さんは、死んでおられました。

真理菜 「毒殺だということは、ピンときた。やっぱりそうだ。三崎小鈴は復讐を始めたん

だ。ボクはついてた。R・Hのイニシャル入りの口紅も拾えたり、これで凶器も分かった

からね。次は虹子の番だ。そうして、虹子も死んだ。なんという幸運だろう。もう犯人は分かっている。ボクは探偵だ。謎を推理して解明してみせることができる。これだけよ。

ボクがしたことはね。こんな邪魔が入らなければ、もっとスムーズに運んでいたのに。

館 「まさにバーチャル・リアリティだな。少女探偵いや真理菜さん、虹子さんの部屋へヒ

ロ・麗子のドレスを持ち込んだのは、君でしょ。いやいや、私の考えるところでは、春奈に口紅を引いたのも君だな。

真理菜 「何をいつてるの。三崎だよ。彼女がやったのに決まってるじゃない。

館 「記憶から抹消されているんだ。虚構の記憶が作られているんだ、彼女の頭の中で。彼

女は、バーチャルな世界で遊んでいるだけだ。

邑久手 「しかし、死体はほんものですよ。

館 「問題はそこだな。

溝 口 「俺のシナリオでは、事件は夜明けとともに解決するんだが。・・・

豊川作造 「もうすぐ夜が明けます。・・・まだ吹雪いておりますが。

真理菜 「事件は解決してるじゃない。三崎小鈴の復讐劇はあっけなく終わったのよ。探偵は勝利したわ。いったい、他にどんな解決や真相があるっていうのよ。

館 「難しくなってきたな。

邑久手 「ゲームの中にほんものの死体が二つですか。

子牛田 「何だ、振り出しにもどったのか？ 忌ま忌ましい。

邑久手 「決め手になるのは、毒物の検証でしょうか。

館 「そうだね。いったい、彼女たちがどうやって死んだのか。

笹木「（意を決したか、何かにふと気づいたかのごとく）あの、

邑久手「えっ？何ですか？

笹木「春奈さんと虹子さんは殺されたのではなくて、病死かも知れません。

皆さん・それぞれ「病死？

邑久手「どういうことですか？

笹木「看護婦をやっております関係で、あれとよく似た死体の写真を本でみたことがある

んです。ひよつとして、虹子さんか春奈さんのどちらか、最近、港のほうに出向かれたことはありませんでしょうか？

豊川作造「それは、お二人とも、ございます。つい先日のことですが。

笹木「（毅然として、立ち上がると）ともかく、もう一度、死体を拝見してよろしいでし

ようか。これは、ちよつと恐ろしいことなのですが、ああいった死に方をするのは。・
・
・

いいつつ、二階へと急ぐ。その後をついていく、邑久手、館、ユキ、近藤、浅田、三崎、
溝口。子牛田も続こうとするが、

土岩フーコ「ねえ、子牛田さん、ミッチーの様子が変なの。

子牛田「何が変だつて？（と、ラジオを落としてしまう）おっと。

ラジオから流れる軽い音楽。

サリー「すごく熱あるみたい。なんか、病気みたいよ。

子牛田「病気？熱、アスピリンでも飲ませておけ。

サリー「でも、すごく様子が変。

土岩フーコ「ミッチー、ミッチー、しっかりしてよ。どうしたのよ。

子牛田「ちっ、世話の焼ける。

と、ラジオの音楽が途切れて。

「ここで、港町管区保健局からのお知らせです。先程もお伝えいたしましたように、

港灣のブラック・マーケットで売買されていた、通称ムーピーと呼ばれるおりますハムスターから、擬似ペスト・バクテリアが検出されていることが、報告されました。港町防疫センターのその後の調査では、このムーピーは、ロシアからの密輸入の動物で、ロシア免疫研究所の実験動物に使われていたことが判明しております。ハムスターは現在、三人程度の客に売却されており、保健局では、この客の足取りを追っております。感染いたしますと、発症する可能性が高く、発症後数時間で死亡する確率が高いことから、保健局では事態を重要視しており、一刻も早い解決が望まれます。繰り返してお伝えいたしますが・

・

子牛田「なん、だって？・・・ムーピー・・・擬似ペスト？・・・おい、おい。冗談じゃない

ぞ。(ミッチーから離れる)

土岩フーコ「なに？何なの？どうしたのよ。

子牛田「ふんな、馬鹿な。(急いで去る)

土岩フーコとサリー、ミッチーを抱きかかえて、去る

ラジオから軽快なダンス音楽が流れてくる。

エピソード

薄暗いフロア。真理菜が笹木に抱きかかえられている。瀕死のようすだ。

真理菜「笹木さん、みんなどうなっちゃった？

笹木「大丈夫ですよ、お嬢さま。大丈夫です。

真理菜「なんだか、ボク、すごく苦しいよ。熱があるんだね。

笹木「(彼女もそうとう疲弊しているようだ) すぐによくなりますよ。

真理菜「犯人は捕まったかな。ボクの推理は間違ってたわよね。

笹木「はい、あれで正しゅうございましたよ。

真理菜「雪、やんだわね。やつとやんだわ。何だかボク、夢をみていたみたい。いまでも

夢の中にいるみたいよ。みんなみんな死んでいっちゃって、ボクももうすぐ死ぬみたいで、でも、それはボクの幻想なのよ。幻なのよ。だって、ボクのまわりを踊子たちがいつぱ

い踊ってるんだもの。真っ赤なルージュを塗ってさ。ああ、踊ってる。あの犯人も、作家も、新聞記者も、映画監督も俳優も。みんな踊ってる。みんな踊子だわ。みんな幻だわ。血のように、踊ってるもの。・・・

笹木「お嬢さま。

豊川作造が、ポリタンクを下げて、入ってくる。

豊川作造「ガソリンでございます。私も、もういけません。後はよろしくお願いいたします。す。(タンクを置くと、倒れ伏す)

真理菜「山道を誰か来るような気がする。これは映画かな。そうだ『雪に血は踊る』って

いう映画のラストシーンなんだよね。あそこにいるのは、犯人かな・・・あのね、犯人は、

真犯人はね・・・(ガクッ)

笹木「お嬢さま！(抱き締める)

音楽高鳴って、炎の中で、踊子たちがダンスを始める。火の粉なのか、あるいは雪なのか、血のような飛沫が降ってくる。

19970428